

昭和 51 年度

宮崎県文化財調査報告書

第 19 集

宮崎県教育委員会

昭和 51 年度

宮崎県文化財調査報告書

第 1 9 集

宮崎県教育委員会

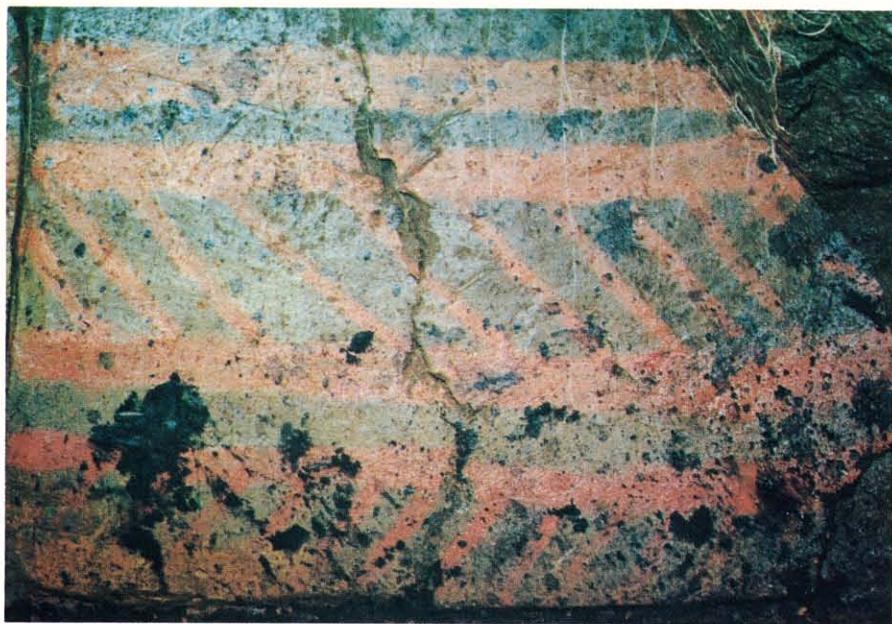
総 目 次

I 旭台地下式古墳群発掘調査 (西諸県郡高原町大字広原旭台 6083-19)	1
II 下水流地下式墳発掘調査 (都城市下水流町築地)	49
III 横谷原村地下式墳発掘調査 (北諸県郡高崎町横谷原村)	57

I 旭台地下式古墳群発掘調査

西諸県郡高原町大字広原旭台6083-19

県文化財保護審議会委員 石川恒太郎
日高正晴
県文化課主事 岩永哲夫



第7号墳 玄室右側壁（撮影田ノ上）



第12号墳 玄室左側壁（撮影田ノ上）

本 文 目 次

I 所 在 地	1
II 発見の動機と調査経過	1
III 調査の結果	2
1. 第 1 号墳	2
2. 第 2 号墳	2
3. 第 3 号墳	3
4. 第 4 号墳	4
5. 第 5 号墳	5
6. 第 6 号墳	5
7. 第 7 号墳	7
8. 第 8 号墳	9
9. 第 9 号墳	9
10. 第 10号墳	11
11. 第 11号墳	11
12. 第 12号墳	13
13. 第 13号墳	14
(付説) 古墳の壁画について	15
IV ま と め	17

挿 図 目 次

第1図 遺跡所在地	1
第2図 旭台地下式古墳群分布図	18
第3図 第1号墳実測図	19
第4図 第2号墳 "	20
第5図 第3号墳 "	21
第6図 第4号墳 "	22
第7図 第5号墳 "	23
第8図 第6号墳 "	24
第9図 第7号墳 "	25
第10図 第8号墳 "	26
第11図 第9号墳 "	27
第12図 第11号墳 "	28
第13図 第12号墳 "	29
第14図 第13号墳 "	30
第15図 第1・2・3号墳副葬品実測図	31
第16図 第4・5・6号墳 "	32
第17図 第7・8・12・13号墳 "	33
第18図 第9号墳 "	34
第19図 第11号墳	35

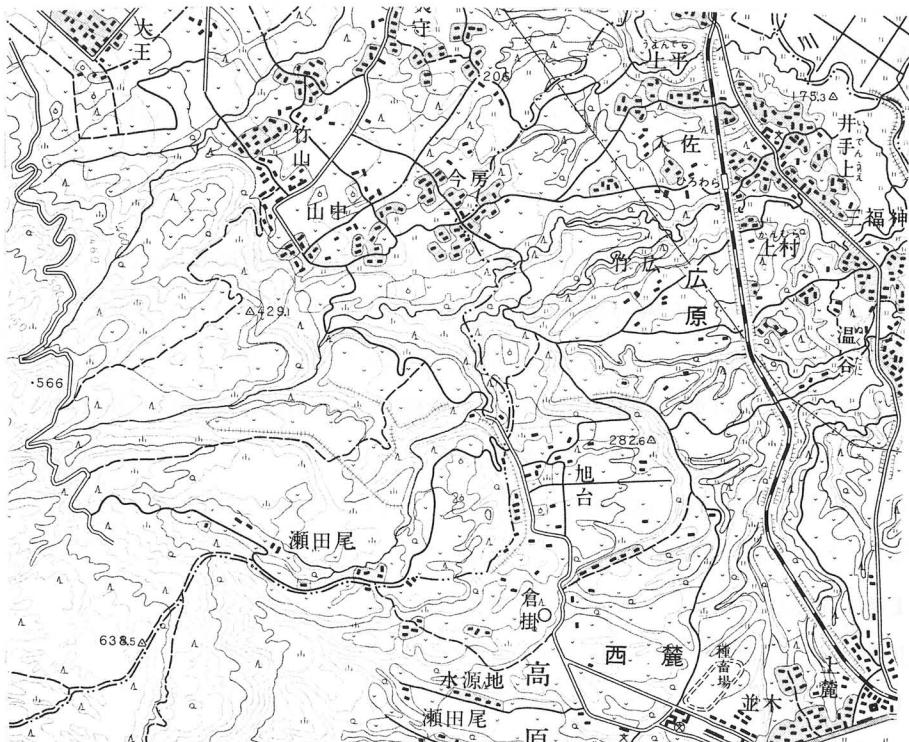
図 版 目 次

図版 1.	(1) 第 1 号墳全景	37
	(2) 第 2 号墳閉塞状況	37
図版 2.	(1) 第 2 号墳玄室内人骨頭部付近(歯のみ残)	38
	(2) 第 2 号墳玄室内床面	38
図版 3.	(1) 第 4 号墳玄室内遺物出土状況	39
	(2) 第 5 号墳閉塞状況	39
図版 4.	(1) 第 6 号墳閉塞状況	40
	(2) 第 6 号墳玄室たなの剣と鉄鏃	40
図版 5.	(1) 第 6 号墳玄室壁画(右壁)	41
	(2) 第 6 号墳玄室壁画(左壁)	41
図版 6.	(1) 第 7 号墳玄室内部(上から)	42
	(2) 第 7 号墳玄室内壁面柱造出し	42
図版 7.	(1) 第 8 号墳閉塞状況	43
	(2) 第 8 号墳玄室内刀子	43
図版 8.	(1) 第 9 号墳玄室内人骨	44
	(2) 第 12 号墳閉塞状況	44
	(3) 第 13 号墳閉塞状況	44
図版 9.	第 1 · 2 · 3 · 4 号墳副葬品	45
図版 10.	第 5 · 6 · 7 号墳副葬品	46
図版 11.	第 8 · 9 号墳副葬品	47
図版 12.	第 11 · 12 · 13 号墳副葬品	48

I 所在地(第1図)

西諸県郡高原町大字広原旭台 6083-19

(県酪農支場の北西標高330mの台地)



第1図 遺跡所在地

II 発見の動機と調査経過

現地は、土地所有者勝吉敏文氏がかねてより牧場として使用されていたのであるが、昭和50年11月牧野改良のためブルドーザーにより掘削整地作業を行なっていたところ、同11月23日、台地の東端付近に地下式古墳の所在することが明らかとなり、ブルドーザーを入れるにしたがい、実際に13基の多きを数えるに至ったのである。同11月25日、地下式古墳群発見の旨、町教育委員会から県教育委員会文化課へ報告があり、翌26日県文化財専門委員石川恒太郎と県文化課主事岩永哲夫が、現地へ赴き、実情調査を行なった。同27日、町教育委員会との話し合いにより、発掘調査を12月4日から12日までの9日間、町と県の合同により実施することに決定したのである。

調査は、県文化財専門委員石川恒太郎 同日高正晴、県文化課主事岩永哲夫の3名が担当した。

調査は、前半の雨と後半の霧島おろしの厳寒のために困難を極め、町教委文化財担当楠元次雄氏をはじめ、町教委職員、広原小学校長真方良穂氏、また終始調査に全力をつくした宮崎大学学生田ノ上哲、白石章二、

足立宏美、渡辺康隆、緒方昭彦、武藤和幸、亀元清美の方々には感謝申し上げる次第である。（岩永哲夫）

III 調査の結果

1. 第1号墳（第3図）

第1号墳はブルドーザーによってほとんど削り取られ、底面からわずか10cmほどが残っているのみであった。

中軸線は東西に近く、やや北寄りである。

全体形は左片袖逆P形をなし、竪穴部から玄室奥壁までの中軸線全長は215cmであった。

竪穴部は底面で長さ85cm、幅112cmの隅丸方形をなしていた。

羨道は長さ40cm、幅70cmであり、高さは不明である。

玄室は奥行90cm、幅190cmの平入り型をなし、中軸線から右方は隅丸方形で、壁は直線的になり、長さ約90cm、左方は楕円状に丸く伸びている。

人骨は1体も残っておらず、副葬品として、剣が大小各1本、鉄鎌は剣にくっついているので、4～5本あったものと考えられる。

① 剣【第15図(1)】

現長563cm、身長54.3cm、身幅3.5～4cmであった。

② 剣【第15図(2)】

現長295cmで剣身のみ残っている。身幅は2～3cmで、柄の方に近づくにつれ急に広くなっているようである。

③ 鉄鎌【第15図(3)】

現長13cm、身長7.5cm、最広部2cmの圭頭細根斧箭式で、口巻がある。

④ 鉄鎌【第15図(4)】

現長12.1cmの身のみである。最広部3.5cmの変形圭頭斧箭式

その他、鉄鎌が2～3本剣にくっついているが、いずれも変形圭頭斧箭式ではないかと思われる。

2. 第2号墳（第4図）

第2号墳は第1号墳の南東9mの地点にあり、第3号と第13号の中間に位置している。

中軸線はほとんど南北に方位し、玄室を北に、竪穴部を南にしている。

全体の長さは底面で約295cmである。竪穴部は、隅丸方形に近く、南面では底に下るにしたがい、ゆるやかな傾斜をなし、北面では急傾斜である。底面での広さは長さ110cm、幅140cmであり、約半分まで閉塞石が構築してある。閉塞は岩塊でもって積み上げ、最上部の石はたてかけ、羨門閉塞をしている。

羨道は竪穴部のほぼ中心からうがち、長さは西側で25cm、東側で30cm、幅は65cmである。高さは

羨門付近では65cmと高く、玄門付近では60cmと低くなっている。また、羨道の底面は、竪穴部より約4cm高くなり段がついているが、玄室の奥に行くにしたがって低くなっている。

玄室は、奥行160cm、幅195cmの平入り型寄棟造りで棚状施設を造り、隅丸方形である。棟の長さは約75cmで底面からの高さは約105cmある。

棚状施設は玄室の周囲をめぐっているが、玄門側の右壁部分のみは造っていないので、あたかも玄門側左壁からはじまり、東壁で終らせているかの如き感じがする。棚の幅は西壁で14cm、北壁で7cm、東壁で10cmである。

人骨は頭を東にして1体あったらしく、奥壁に近く歯のみかろうじて残存していた。また、頭部とみられる付近には朱の散乱があった。

また、興味深いのは、遺体を長方形に取り巻くように、有機質（？）の残存があったことである。図でもわかるように、遺体に敷いたものか、被せたものか、どちらかであろう。閉塞に使った石と同じものが2個玄室内においてあるのも何らかの意味があろう。

副葬品は、剣1振と刀子1本だったが、剣は東壁棚上の北寄りに峰を奥壁に向けて、刀子は東壁棚上の南寄りに峰を羨道に向けて置いてあった。

① 剣【第15図(5)】

全長73.8cm、身長57cm、身幅3.5cm、柄長14.5cm、柄幅1.5～2.5cm、目釘穴1個がある。また所々に鞘の木質が残存している。

② 刀子【第15図(6)】

現長10.5cm、身長7cm、身幅0.7～1.5cm、棟幅0.3cmである。

3. 第3号墳（第5図）

第3号墳は、第2号墳の北東約5m、第4号墳の南西約6mの地点に位置している。

中軸線はほぼ東西に位置し、全体の長さは底面で約300cmである。

竪穴部はほぼ隅丸方形で長さ120cm、幅150cmである。堀り込みのはじまる上面では長さ180cm、幅225cmで、堀り込むにつれ、前記の大きさにまで狭まっていく。底面から堀り込みのはじまる上面までの深さは約2mである。

閉塞は、10×30cmほどの石を積み上げて羨門部を塞いでいる。

羨道は竪穴の西壁の中程から穿ち、南側での長さ34cm、北側での長さ39cm、中央で36cmである。幅は70cm、高さは羨門部で79cm、玄門部で74cm、中央で75cmである。

玄室は、天井が破壊されているが、残っている部分から判断すると、棚状施設を有する平入り型寄棟造りと考えられる。平面形は方形をなし、奥行き150cm、幅180cmの大きさである。棚状施設は、南、西、北の3壁に造り、それぞれ3cm、5cm、5cmの幅がある。

人骨は3体あったらしく、部屋全体を使うような形で納められ、頭は3体とも北向きて、羨道を入れると右手にあることになる。

① 刀子【第15図(7)】

現長11.5cm、身長7.2cm、身幅は全体に細く、0.7～1.0cm、棟幅0.3cm。

② 刀子【第15図(8)】

腐蝕がはげしいので、本来の形はわかりにくいが、現長10cm、身長6.5cm、身幅（中央で）1.3cm、棟幅0.3cmである。

③ 刀子【第15図(9)】

鋒先は折れているが、現長10.7cm、身長6.5cm、身幅（中央で）1.0cm、棟幅0.3cmである。

④ 刀子【第15図(10)】

柄の方が折れているが、大型の刀子である。現長11.5cm。

⑤ 鉄鎌【第15図(11)】

現長14.7cmで身のみである。最広部4.5cmで変形圭頭斧箭式とみられる。

⑥ 鉄鎌【第15図(12)】

現長13.5cmで身のみ。最広部4.0cmの変形圭頭斧箭式。

4. 第4号墳（第6図）

第4号墳は第3号墳の北東約6m、第5号墳の北西約5mの地点に位置している。

中軸線はほとんど南北に方位し、竪穴部を北に、玄室を南にしている。

地層を見ると、上層から①黒土層（20cm）、②高原スコリア（27cm）、③黒色土層（207cm）、④黒褐色粘土層（47cm）、⑤淡褐色粘土層（27cm）、⑥オレンジ層となっており、主体部は④～⑥にかけて構築している。なお表土から玄室床面までの深さは350cmである。

中軸線全体の長さは253cmである。

竪穴部はかなりな部分までブルドーザーで削り取られており底面がわずかに残るのみであった。底面中央では長さ70cm、幅130cmで、中央より西の方が狭くなっている。また、竪穴部の中央から南の方に向けて羨道がうがたれている。しかし、この羨道を塞ぐ閉塞石はこの古墳では存在せず、竪穴上部閉塞ではなかったかとも考えられるが定かでない。羨道は、入口で幅55cm、出口では68cmとなっており、玄室側が広くなっている。長さは中央で40cmである。高さは羨門部玄門部とともに70cmであるが、羨道中央付近は75cmあり若干の掘り窪みがあった。

玄室は天井が落ち込み破壊されていたが、奥行き140cm、幅170cmの平入り型寄棟造りと考えられる。

また棚状施設を東、西、南の三方に有し、それぞれ、7cm、10cm、10cmの幅を持っている。

人骨は奥壁寄り東隅にわずかな頭骨片が残存しているのみであったが、玄門寄り東隅に朱の痕跡があり、あるいはもう1体ここにあったのかも知れない。

副葬品は、この旭台では割に多い方で、直刀1振、剣2振、刀子2本、鉄鎌4本（内1本は身を欠く）の計9点であった。

① 直刀【第16図(1)】

現長 83.0 cm, 身長約 6.6 cm, 身幅約 3 cm, 棟幅 0.9 cmである。所々に鞘の木質が残っている。

② 剣【第 16 図(2)】

身の先が折れているが、現長 48.0 cm, 身幅 3.2 cm。

③ 剣【第 16 図(3)】

剣身のみであるが、身長 17.5 cm, 身幅中央で 2.3 cm の小形である。

④ 刀子【第 16 図(4)】

現長 11.4 cm, 身長 7.8 cm, 身幅 1.1 cm, 棟幅 0.3 cm である。

⑤ 刀子【第 16 図(5)】

保存状態が悪く、中央付近のみが残っている。現長 4.5 cm, 身幅 1.5 cm, 棟幅 0.3 cm。

⑥ 鉄鎌【第 16 図(6)】

現長 11.9 cm, 最広部 3.0 cm の変形圭頭斧箭式。

⑦ 鉄鎌【第 16 図(7)】

現長 11.0 cm, 最広部 3.7 cm の変形圭頭斧箭式。

⑧ 鉄鎌【第 16 図(8)】

現長 9.5 cm, 最広部 3.4 cm の変形圭頭斧箭式。

5. 第 5 号墳（第 7 図）

第 5 号墳は、第 4 号墳の南東約 5 m, 第 6 号墳の北約 1.4 m の地点に位置している。

中軸線はほぼ東西に近く方位しているが、わずかに南に振っている。全体の長さは 315 cm である。

竪穴部はブルドーザーによって既に半壊されているが、方形を呈し、長さ 110 cm, 幅 100 cm である。竪穴の西面に羨道をうがち、自然石をもって羨門部を閉塞しており、石と石の間を粘土ではりつけている。

羨道は、長さ 6.0 cm, 羨門の幅 5.6 cm, 玄門の幅 6.0 cm, 高さ 6.5 cm である。

玄室は、天井が落ち込み破壊されていたが、奥行き 145 cm, 幅 175 cm の台形プランをなし、四方に棚状施設を有する平入り型寄棟造りと考えられる。棚状施設の幅は、南面で 5 cm, 西面 6 cm, 北面 4 cm である。

人骨は 1 体も残存していなかったが、右奥床面に朱痕がみられた。副葬品は奥壁棚に刀子が 1 本載せてあったのみである。

① 刀子【第 16 図(10)】

先端が欠けているが、現長 6.0 cm, 身長 3.0 cm, 身幅（中央で） 0.8 cm, 棟幅 0.3 cm である。

6. 第 6 号墳（第 8 図）

第 6 号墳は、第 5 号墳の南約 1.4 m, 第 7 号墳の西約 1.1 m の地点にある。

この 6 号墳の層序は、①黒土層（19 cm）、②高原スコリア（30 cm）、③黒色土層（154 cm）、④黒褐色粘土層（45 cm）、⑤淡褐色粘土層（30 cm）、⑥オレンジ層（25 cm）、⑦カシワバンとなつており、主体部は④～⑦にかけて構築されている。したがって表土から玄室床面までは、320 cm ある。

中軸線は、南東（竪穴部）～北西（玄室）に方位している。

古墳全体の底面での長さは、約370cmあり、全形は左片袖の逆P形をしている。

竪穴部について記せば、堀り込みのはじまる上面の形は半円形をなし、長さ205cm、幅190cm、底面では隅丸方形に近づき、長さ120cm、幅110cmでかなり小さくなる。堀り込み面から底までは約160cmの深さがある。

羨道は、竪穴部の北西面の右側寄り（右壁から7cm、左壁から50cm）に穿ち、石の積上げによって羨門閉塞をしている。また、石を取り除くと、羨門のまわり一面に朱の塗布がみられた。羨道の形は、長さ（左側）56cm、（右側）64cm、幅（入口）53cm、（奥）63cm、高さ（入口）57cm、（奥）60cmという数字が示すように入口が狭く、奥が若干広くなっている。また、羨道の右壁はわずかにカーブしながら、そのまま玄室の奥壁にまで達している。

玄室は前に記した如く、右壁は羨道をそのまま伸ばしたものであり、左側にのみ広がりを持つ逆P形のプランである。

玄室全体の形を見ると、四方に棚状施設を持つ平入り型切妻造りということができる。規模は、中央で考えるならば、奥行き195cm、幅158cmの台形に近く、左奥に行くほど狭くなる。

棚状施設は、壁面全体四方をめぐり、左壁中央で9cm、奥壁中央で9cm、右壁中央で11cmの幅を持っている。

天井が破壊されているので、わかりにくいところもあるが、第8図に示しているような朱塗りの壁画が左右両壁面に同じように描かれていた。右壁面の横線は画線2本の間に朱を塗っているように見えるが、実際は画線1本を先ず線刻し、その上を朱でもってなでるように塗りつけたものである。中央たてに描いているのは束柱である。

人骨は残っていなかったが、朱の痕跡が4ヶ所見られたので、おそらく4体埋葬されていたのであろう。

副葬品は、床面に刀子が1本あった他はすべて棚の上に置かれていた。内容は剣2振、刀子4本、鉄鎌12本、計18点であった。

① 剣【第16図11】

現長37cm、身幅（中央で）3cm、所々に鞘の木質残片がある。

② 剑【第16図12】

現長22cm、身幅2.8cm、所々に鞘の木質残片がある。

③ 刀子【第16図13】

現長100cm、身幅（中央で）1.5cm、棟幅0.3cm。

④ 刀子【第16図14】

現長95cm、身幅（中央で）1.4cm、棟幅0.3cm。

⑤ 刀子【第16図15】

2本に折れしており、中間部分を欠いている。身幅1.7cm、棟幅0.3cm

⑥ 刀子【第16図16】

現長 160cm, 身幅(中央部) 2.1cm, 棟幅 0.4cm。

⑦ 鉄鎌【第16図(17)】

現長 11.3cm, 最広部 1.7cm の広鋒両丸造三角形式。

⑧ 鉄鎌【第16図(18)】

現長 6.5cm, 最広部 2.0cm の類柳葉両丸造三角形式。

⑨ 鉄鎌【第16図(19)】

現長 160cm, 最広部 3.8cm の変形圭頭斧箭式。

⑩ 鉄鎌【第16図(20)】

現長 11.0cm, 最広部 4.5cm の変形圭頭斧箭式。

⑪ 鉄鎌【第16図(21)】

現長 8.8cm, 最広部 4.5cm の変形圭頭斧箭式。

⑫ 鉄鎌【第16図(22)】

現長 18.8cm, 最広部 4.3cm の変形圭頭斧箭式。

⑬ 鉄鎌【第16図(23)】

現長 17.0cm, 最広部 3.6cm の変形圭頭斧箭式。

⑭ 鉄鎌【第16図(24)】

現長 27.0cm, 最広部 4.0cm の変形圭頭斧箭式。

⑮ 鉄鎌【第16図(25)】

現長 17.8cm, 最広部 4.5cm の変形圭頭斧箭式。

⑯ 鉄鎌【第16図(26)】

現長 16.2cm, 最広部 4.4cm の変形圭頭斧箭式。

⑰ 鉄鎌【第16図(27)】

現長 8.2cm, 最広部 3.8cm の変形圭頭斧箭式。

⑱ 鉄鎌【第16図(28)】

現長 16.8cm, 最広部 3.3cm の変形圭頭斧箭式。

7. 第7号墳(第9図)

第7号墳は、第6号墳の東約11m、第8号墳の南西約10mの地点に位置している。

この7号墳の層序は、①黒土層(11cm)、②高原スコリア(30cm)、③黒色土層(150cm)、④黒褐色粘土層(35cm)、⑤淡褐色粘土層(32cm)、⑥オレンジ層(34cm)、⑦カシワバンとなっており、主体部は、③～⑦にかけて構築されている。したがって表土から玄室床面まで295cmある。

中軸線は、南東(竪穴部)～北西(玄室)に方位している。

古墳全体での長さは、底面で約300cmあり、全体形は左片袖の逆P形をしている。

竪穴部はブルドーザーにより半分以上破壊されていたが、底面でみると、半円形をしており、長さ105cm、

幅110cmで、石でもって羨門を閉塞している。この石を取り除くと、6号と同様羨門外壁面に朱を塗布していた。床面は、羨道玄室より一段16cmほど深く掘り込んでいる。

羨道は、豎穴部の北西面右から20cm、左から53cmの間に穿っている。

長さは右側で22cmと短かく、左側では32cmと長い。幅は48cm、高さは入口で90cm、奥で86cmある。

玄室は、四方に棚状施設を持った平入り型切妻造りということができる。

前述した如く、逆P形をしているが、第6号と若干違い、羨道の右壁がそのまま奥壁にまでは続かず、羨道の終わる点で、床面で3cm、棚状施設で9cmほど右側に掘り込んでいる。規模は、中央付近で（床面）、奥行き165cm、幅162cmあり、中央から左側部分が狭まって台形をなしている。棚状施設は四方にめぐらしているが、手前左壁、左壁、奥壁、右壁それぞれ4cm、6cm、10cm、7cmの幅を持っている。

6号につづいて、第7号も壁画を描いているが、図に示した、左、右壁のほかに手前壁、屋根にも描いていた。この壁画は画線を刻まずにそのまま描いている。また束柱を造り出している。

人骨は5体分あり、それぞれ頭骨のみがよく残っていたが、その中で奥壁に最も近い頭骨には朱が塗布されていた。

副葬品は、剣1振、刀子2本、鉄鎌8本、計11点であった。

① 剣【第17図(1)】

現長377cm、身長297cm、身幅2.3cm、身厚0.5cm。

この剣には身の中央両面に鎬がある。

② 刀子【第17図(2)】

現長4.1cm、棟幅0.2cm。

③ 刀子【第17図(3)】

細身である。現長12.2cm、身長9.0cm、身幅（中央で）0.9cm、棟幅0.2cm。

④ 鉄鎌【第17図(4)】

現長11.6cm、最広部3.3cmの変形圭頭斧箭式。

⑤ 鉄鎌【第17図(5)】

現長17.4cm、最広部4.6cmの変形圭頭斧箭式。

⑥ 鉄鎌【第17図(6)】

現長15.4cm、最広部4.0cmの変形圭頭斧箭式

⑦ 鉄鎌【第17図(7)】

現長8.7cm、最広部1.3cmの狭鋒両丸造三角形式。

⑧ 鉄鎌【第17図(8)】

現長1.3cm、最広部3.7cmの変形圭頭斧箭式。

⑨ 鉄鎌【第17図(9)】

現長13.5cm、最広部3.7cmの変形圭頭斧箭式

⑩ 鉄鎌【第17図(10)】

現長18.4cm, 最広部3.4cmの変形主頭斧箭式

⑪ 鉄鎌【第17図(11)】

現長15cm, 最広部2.3cmの類柳葉両丸造三角形式

(岩永哲夫)

8. 第8号墳(第10図)

第8号墳は第7号墳の北方に約5m離れたところに堅穴式前室を設け、その北方に羨道と玄室を設けていたがこの古墳の中心線は南北の方向より10度東に傾いていた。堅穴式前室は図版に示すごとく、梯形に近い形で、上部が広く底部が狭いが、上部は南北の径が中央で1.70m、東西の巾は中央で1.40mあり、底部は南北の径1.15m、東西の巾1.05mである。深さは地表から1.35mで、底部は羨道に向ってやや低下している。

羨道は前室の北壁の西端から40cm東端から12cmの間に開口しており巾53cm、高さ63cm、長さ30cmで北東の方向に斜めに玄室につながり、奥に行くほど広くなって玄門の広さは65cmとなっていた。羨道の入口はかなり大きい自然石を積上げて閉塞してあった。羨道の底部も若干玄室に向って低下していた。

玄室は羨道の奥(北方)にあって、羨道から見て西に拡がる片袖造りで、床面は東壁の長さが1.60m、北壁の長さが1.80m、西壁の長さが1.50m、南壁の長さが95cmで羨道に接している。従って玄室の床面はほぼ正方形に近い形であった。またこの東西南北の壁には巾5cm~10cmの棚状施設があり、棚の高さは東壁で床面から35cm、北壁で44cm、西壁で46cm、南壁も同じであった。天井は屋根の頂上部を1部残して全部破壊されていたが、西方の壁と屋根の頂上部から見て、天井の高さは床面から1.20mで天井は四注造りであったと思われ、四注造りの平入りの構造であったと思われる。

遺物は東壁の棚状施設の南端から13cmのところに柄を置いて刀子1振があったと、その棚状施設の下に東壁に近く頭蓋骨3体が南北に並んでいたが、奥の1体以外は破片となっていた。

遺物、①刀子【第17図(12)】1振。総長78cm、柄長2cm、柄巾9cm身長58cm、身巾0.7cm、棟厚0.2cmであった。

9. 第9号墳(第11図)

第9号墳は第8号墳の東南方に約11m距たるところに玄室を置き、堅穴式前室を東南に、羨道や玄室を西北にして営まれていた。それでこの古墳の中軸線は南北の方向より45度西に傾いていたわけである。

堅穴式前室は羨道のある壁を弦部とする半円形に近い形で、この羨道のある壁の長さは玄室に向って反っているが、1.40mあり、その中央より弧部の頂上までの長さは1.43mである。しかしこの堅穴式前室も底に降るほど狭くなり、底部は羨道のある壁の長さが95cm、弧部の頂上までの長さが90cmとなっている。そして前室の地表からの深さは1.40mであった。

羨道の入口すなわち羨門付近には数個の自然石が乱れて残っていたが、これらの石で羨門は閉塞されていたわけである。羨道は壁の西端から35cm、東端から15cmの間に開口して、その巾は45cm、高さも

4.5 cmであった。長さは 6.0 cmであったが、羨道は奥に入るごとに巾が広くなり、特に西側の壁は漏斗状に拡がって玄室に接し、玄門の広さは 7.0 cmとなっていた。天井は平らで、底部も前室と同じ高さで平坦であった。

玄室は羨道の奥に接していたが、これもまた西方にのみ拡がった片袖造りで、床面は梯形に近く、東壁は長さ 1.40 mで、羨道の東壁の延長であり、北壁は長さ 1.45 m、西壁は長さ 1.08 m、南壁は長さ 1 mで羨道に接していた。そして東、西、南、北の各壁にはそれぞれ 3 cm～7 cm 巾の棚状施設があり、その高さは床面から 40 cm のところにあったが、東と西の各棚状施設のほぼ中央に巾 1.5 cm の四角な柱が直立していたことを示す切り込みがあったことが注目された。これは昭和 39 年 3 月発行の「宮崎県文化財調査報告書」第九輯に当時県立博物館学芸員であった栗原文蔵氏が報告している小林市尾中原の地下式古墳の実測図に記されるているのと同じものであると思われる。

玄室の床面は平らで何らの施設もなかったが、遺物は豊富で、東壁の棚状施設の上に北壁に接して鉄鎌 5 本があり、さらに柱に近い所に鉄鎌 1 本と刀柄 1 および刀子 1 振があり、玄室の床面にはおよそ三体分の人骨が頭を東壁に接し、足を西方にして伸展葬されていたが、天井部の破壊された部分が落ち込んで無惨に散乱していた。そして玄門の東側に近く鉢が 1 本穂先を東壁に接してあり、その斜西側に剣が 2 振鉢を西方に向けて併行に置かれていた。また骨片の間に剣の折れ 2 個を貝釧の完全なもの 6 個と破片 6 個が見出されたが、貝釧は復原すれば皆で 8 個分と考えられる。

玄室の天井は一部を残して破壊されていたが、東西の壁に柱状の切込があることから考えて屋根は切妻造りであったはずで、古墳はその平入りである。床面より屋根の高さは 1.08 m で、床面の地表よりの深さは 1.42 m であった。

遺物は次の通りである。

① 剣【第 18 図(1)】

総長 43.5 cm、柄長 1.03 cm、中茎巾 1.5 cm、厚さ 0.3 cm で、柄頭より 4 cm のところに目釘穴があり、鍔元に若干木質が残っている。身長は 33.2 cm、身巾 3 cm、身の厚さ 0.4 cm である。

② 剣【第 18 図(3)】

総長 40 cm で鋒部の先端と中茎の多くを欠損し、柄部は長さ 2 cm を残すのみで、関部の巾 2 cm、切損部の巾 1.3 cm である。身長 38 cm、身巾 2.7 cm、身厚さ 0.4 cm で両端部に鞘の木質を若干残している。

③ 剣【第 18 図(2)】

長さ 17.5 cm の身部の折れと、長さ 1.3 cm の柄部と刀部の破片である。身巾 2 cm 柄の長さは 8.5 cm、関部の巾 2.5 cm、中茎の巾 1.1 cm である。関部に木質を少し残している。

④ 刀柄【第 18 図(4)】

現長 1.28 cm、巾 1.8 cm で木質の上に組状のものを巻いている。

⑤ 刀子【第 18 図(5)】

刃の先端を欠いて現長 1.15 cm、復原すれば身長 7 cm、身巾 1.5 cm、棟巾 0.2 cm、柄長 5 cm で柄頭は切損している。柄部は木質で覆われており巾 2 cm である。

⑥ 鉢【第18図(4)】

総長24cmで、身と袋穂より成り、身は長さ11cm、身巾2cmの細身である。身の厚さは0.7cmで断面は菱形をなす。袋穂は長さ17cm、袋は両方から合わせるもので、袋の下端は径2.5cmで上方の身に近づくに従って細くなっている。この部分に柄をさし込むわけである。

⑦ 鉄鎌【第18図(6)】

全長18.5cm、平根鉢形で身巾4.8cm、口巻と矢竹の1部がついている。

⑧ 鉄鎌【第18図(7)】

全長15.5cm、平根鉢形で身巾4.5cm、口巻がある。

⑨ 鉄鎌【第18図(8)】

全長16cm、平根鉢形で身巾4.3cm。

⑩ 鉄鎌【第18図(9)】

全長12.2cm、平根鉢形で身巾3.5cm、口巻がある。

⑪ 鉄鎌【第18図(10)】

全長15cm、平根二段逆刺形で身巾2cm、口巻がある。

⑫ 鉄鎌【第18図(11)】

全長19.5cm、平根二段逆刺形で口巻と矢竹の1部がついている。

⑬ 貝釧【第18図(12)～(22)】

8個分、貝はイモガイを輪切りにしたもので、多少の差はあるが、だいたい長径8cm、短径6cmの橢円形である。

10. 第10号墳（奥壁の痕跡のみ）

11. 第11号墳（第12図）

第11号墳は第9号墳の東南方10mのところに堅穴式前室を設け、その西方に羨道と玄室を設けて嘗めていたが、この古墳がこの遺跡では最も東に位置していた。古墳の堅穴式前室から羨道と玄室を貫ぬく中軸線は南北の方向より約55度西に傾いていた。

堅穴式前室の上方は殆んど破壊されており底部を測り得るに過ぎなかったが、底部は羨道のある壁を基部とする梯形を呈し、羨道のある壁の長さは1.40m、その東側の壁の長さは1.08m、南側の壁は8.5cm、西側の壁は1.05mで、南側以外の三方の壁は何れも外方に向ってやや張っていた。堅穴式前室の底部は平坦で、深さは地表から1.80mであった。

羨道は北壁の東端から25cm、同西端から45cmのところに開口していたと思われるが西方は壊れていた。それで高さも長さも計ることができなかつたが羨門部には比較的大きい自然石が積重ねてあったが、これで羨門を閉塞していたわけである。なお、羨道の底部は堅穴式前室の底より約9cm高く上っている。

玄室は羨道の奥に接続していたが、ここも羨道の西側の1方のみに張り出した片袖造りで、玄室の形は

長方形であった。すなわち羨道から入って右側の壁は長さ1.40m、奥壁の長さは1.60m、左壁の長さは1.20m、入口横の壁は長さ1.05mでその先は壊れていた。そしてこれらの玄室の四方の壁には巾3cmから10cmの棚状施設がついていた。そして玄室の床面は羨道の高さと同じで平坦であったが、注目されたのは左壁の奥壁に接するところから手前に40cmのところに、巾15cmの間仕切のような高い部分があったことで、これは壁から玄室内に直角に伸びていたが、15cmの所から先は壊れて存在しなかった。

玄室には凡そ6体分の人骨が葬られていたらしく向って右側の壁の下に5個分の頭蓋骨片が並び、その奥に頭蓋骨のあった跡らしい骨粉のあるところがあった。しかし散乱しているこれらの骨片を見ると、頭蓋骨の数に比して頸椎や大腿骨、脛骨などの数が少ないようであるから、天井が壊れ落ちたとき、最も奥にあった頭蓋骨が飛んで手前から4番目のところに行き、朱を塗っている2個の頭蓋骨も手前から5番目の位置から2番目のところに飛んだものと見れば、ここに葬られていたのは4体分となり、骨の数とはば見合うことになる。そしてこれらの骨の間に剣1振と刀子1振、鉄鎌2本があった。鉄鎌の1本は右壁のほぼ中央、第4番目の頭蓋骨と第5番目の頭蓋骨の間に壁と平行に根を入口に向けてあり、剣は鉢をこの鎌の刃部に接して柄を斜に奥に向けてあった。また刀子は奥壁の西の隅に刃を玄室の中央に向けてあり、もう1つの鉄鎌は玄室のほぼ中央に刃を左に向けて置かれていた。また右壁の棚状施設の上には、ほぼ中央に鉄鎌多数が刃を奥に向けて置かれ、その中に剣1振が混っていた。さらに奥壁の棚状施設の上にもほぼ中央に鉄鎌が刃を左方にに向けて1塊となって置かれ、その棚が左側の棚と接するところに剣1振が柄部を奥にして置かれていた。

玄室の天井は中央から奥を残して破壊されていたが、屋根の頂上には棟木を象とする巾12cm、厚さ5cmの切り出しが造られていた。それで玄室の屋根は切妻造りで平入となっていた。棟の高さは床面から1.10mで、床面の地表からの深さは1.67mであった。

遺物は次の通りであった。

① 剣【第19図(1)】

総長38cm、身長33.5cm、身巾中央で2cm、身の厚さ0.4cm、柄長4.5cm、中茎巾1.5cm、同厚さ0.3cm。なお、この剣には身の中央両面に鎬がある。

② 剣【第19図(2)】

総長24.2cm、身長22cm、身巾2cm、身の厚さ0.4cm、中茎は長さ2.2cm、巾1.84cm、厚さ0.4cm

③ 剣【第19図(4)】

折損して現長10cm、身長4.5cm、身巾2cm、身厚0.4cm、中茎の長さ5.5cm、中茎巾1.3cm、厚さ0.3cmで折損部に目釘穴のようなものが半ば見える。

④ 刀子【第19図(3)】

総長9.5cm、身長6.3cm、身巾1.2cm、棟巾0.3cm、柄長3.2cm、中茎巾1cm、同厚さ0.3cmで柄の木質を1部残しており、鍔元に鹿角装がある。

鉄鎌は13本で、そのうち11本は平根で2本は尖根である。

⑤ 鉄鎌【第19図(5)】

平根鋒形、総長9cm、刃巾3.3cm、同厚0.3cm、口巻がある。

⑥ 鉄鎌【第19図(8)】

平根鋒形、総長11.5cm、刃巾2cm、同厚0.2cm、口巻と矢竹の1部がある。

⑦ 同【第19図(7)】

平根同、総長9.8cm、刃巾2.3cm、刃厚0.2cm、口巻がある。

⑧ 同【第19図(9)】

平根同、総長14.5cm、刃巾3cm、刃厚0.4cm、口巻と箆の1部がある。

⑨ 同【第19図(11)】

平根同、総長15.5cmで尖端を少し欠いている。刃巾3.7cm、同厚0.5cm、口巻と箆の1部がある。

⑩ 同【第19図(10)】

平根同、総長13cm、刃巾4.3cm、同厚0.3cm。

⑪ 同【第19図(12)】

平根同、総長12cm、刃巾4.5cm、同厚0.2cm。

⑫ 同【第19図(13)】

3 平根同、総長16.5cm、刃巾4cm、同厚0.4cm、口巻、箆の1部がある。

⑬ 同【第19図(14)】

平根同、総長17.5cm、刃巾3.5cm、同厚0.4cm、口巻がある。

⑭ 同【第19図(15)】

平根同、総長17cm、刃巾4.4cm、同厚0.3cm。

⑮ 同【第19図(16)】

平根同、総長17cm、刃巾4cm、同厚0.2cm、口巻がある。

⑯ 同【第19図(6)】

尖根柳葉形、総長10.8cm、刃巾1cm、同厚0.3cm、口巻がある。

⑰ 同【第19図(7)】

尖根鑿形、総長11.8cm、刃巾1.5cm、同厚0.4cm、口巻、箆の1部がある。

12. 第12号墳（第13図）

第12号墳はこの台地の遺跡の東北端に第6号墳の東北方約10mのところに竪穴式前室を西南に羨道と玄室を東北にして営まれていたが、この古墳の竪穴式前室から羨道と玄室を貫ぬく中軸線は南北の方向より約30度西に傾いていた。

竪穴式前室は羨道のある壁を基底とする梯形に似た形で、上方が広く底に降るほど狭くなっていたが、上端では基底の壁の長さ2mで、この壁を北壁と略称すれば、東壁は長さ190m、南壁は長さ180m、西壁は長さ160mであるが、南壁と西壁は半円状になっていた。底部は基底（北壁）の長さ1m、東壁の長

さ 9 0 cm, 南壁の長さ 8 0 cm, 西壁の長さ 8 0 cmで, 地表からの深さは 1.95 m で, その底部は平坦であった。

羨道は北壁の西端から 3 3 cm, 東端から 2 5 cm の間に開口して巾 4 5 cm, 高さ 5 5 cm, 長さ 4 5 cm で, 入口は大きい自然石を積上げて閉塞していた。羨道の天井は平らであったが, 玄室に近づくに伴ってやや高くなっている, 底部も羨門部は竪穴式前室の底より直角に 1 5 cm 高く, 玄室に近づくに従って次第に低くなり, 羨門部の高さ 5 5 cm に対し玄門部の高さは 6 5 cm であったが, それでも玄門部の底は竪穴式前室の底より約 8 cm 高かった。また羨道の巾も玄室に近づくほどやや広くなり, 玄門の巾は 5 0 cm であった。

玄室は羨道の奥に接しており, その形はほぼ正方形に近かったが, これも羨道から向って左(西)側のみに拡がっている片袖造りであった。その大きさは羨道から入って右(東)壁の長さが 1.85 m, 奥(北)の壁の長さが 1.75 m, 左(西)側の壁の長さが 2 m, 南側の壁の長さが 1.80 m であるが, その東方に 53 の羨道がついているので, 実際の南壁の長さは 1.25 m である。そして四方の壁には床面から 6 5 cm ぐらいの高さのところに巾 5 cm 内外の棚状施設があるが, 玄室の床面は平坦であり, 奥壁に向ってやや高くなっているので, 棚状施設の床面からの高さは玄門付近では 6 5 cm であるが奥では 5 5 cm であった。従って玄室の床面は奥に向って約 1 0 cm 高くなっているわけである。なお玄室入口の東西の壁の棚状施設の下に巾 1 8 cm の柱を示す切り込みが直立し, また東西の壁の棚状施設の中央に上から棚まで直立した柱を示す巾 1 0 cm の切り込みがあった。そして東西の壁には 2 本の横の線刻直線に朱を塗ったもの 2 本を描いた壁画が描かれていた。

玄室内の床面には 4 体分と思われ 3 人骨が頭蓋骨を東壁の下に並べ, 足を西方に伸して葬られていた。そして奥(北)壁の棚状施設の上に刀子 2 振と鉄鎌 2 本が副葬されていた。天井の上部屋根の部分は破壊されていたが壁の構造から見て切妻造りの平入であったと思われる。

遺 物

① 刀子【第 17 図⑬】

身の鋒を欠ぎ, 現長 6 7 cm, 身長 4 cm, 身巾中央で 1 cm, 棟巾 0.3 cm, 柄長 3 cm, 巾 2 cm で木質を残存している。

② 刀子【第 17 図⑭】

総長 9.5 cm, 身長 5.5 cm, 身巾 1.1 cm, 棟巾 0.3 cm, 柄長 3 cm, 巾 2.3 cm で木質を残している。

③ 鉄鎌【第 17 図⑮】

平根鉢形, 総長 19.7 cm, 刃巾 5 cm, 刃厚さ 0.3 cm, 口巻と籠の 1 部を残している。

④ 鉄鎌【第 17 図⑯】

平根鉢形, 総長 14 cm, 刃巾 3.8 cm, 刃厚さ 0.4 cm, 口巻がある。

13. 第 13 号墳(第 14 図)

第 13 号墳は第 12 号墳の北方に約 8 m を距てて存在したが, これは蓋石式の地下式古墳であった。

蓋石式というのは竪穴式前室の底にある羨道の入口を石や粘土で閉塞して竪穴式前室を土で埋めるのではなく、竪穴式前室の頂上部を石で閉塞して竪穴式前室は埋めずにそのまま残しているもので、そのために一般の竪穴式前室は上が広く、底部が狭いが、蓋石式では底部が広く上部が狭く造られている。

もちろん石で蓋をしただけでは雨水などが玄室に入り込むので、土をその上に盛り上げているわけである。第13号の竪穴式前室は四角形で、上部は東西85cm、南北50cmの長方形であり底面は東壁が1.25m、南壁が1.15m、西壁が1.10m、北壁が1.28mで羨道のある東壁を底辺にした梯形に似た形で地表からの深さは1.20mで頂上部を10個ぐらいの自然石で塞いでいた。そして竪穴式前室は空洞で底部は平坦であった。

羨道と玄室はその南東の方向にあったが、この古墳の竪穴式前室と羨道と玄室を通じての中軸線は南北の方向より40度東に傾いていた。羨道は東壁の北端から40cm、南端から25cmのところに開口して巾57cm、長さ35cm、高さ65cmであるが、羨道の底面は竪穴式前室の底面より7cm高くなっていた。広さは玄室に近づくに伴なって広くなり玄門の広さは65cmで底面は平坦で天井も平らであった。

玄室はその奥にあったが、これも向って左(北)側に一方的に拡がる片袖造りで、南北に長い長方形をなし、奥の東壁の長さは1.65m、北壁の長さは1.25m、南壁の長さは1.25m、西壁の長さは1mで、その南方に羨道がついていた。そして東壁には10cm内外、西壁には5cm内外の棚状施設があり、羨道の南北の両壁と玄室の南と西の壁に朱が塗ってあった、玄室の床面は、羨道と同じ高さで平坦であったが、人骨は存在しなかった。遺物は玄室の西壁の北端から30cm南のところに鉄鎌が1本刃を北に向けてあり、さらに東壁の棚状施設の上に刀子2振と鉄鎌2本があったが、何れも刃を向けて置かれていた。玄室の天井部は棚の上から破壊されていた。

遺 物

① 刀子【第17図18】

総長87cm、身長6cm、身巾中央で1.1cm、棟巾0.3cm、柄長2.7cm、柄巾2.3cmで木質を残していた。

② 刀子【第17図19】

これは柄部も身の先端もない身の1部で、現長4.5cm、身巾1cm、棟巾0.3cmである。

③ 鉄鎌【第17図20】

平根鉢形、総長87cm、刃巾2cm、刃厚さ0.4cmで、口巻がある。

④ 鉄鎌【第17図21】

平根鉢形、総長65cm、刃巾2.2cm、刃厚さ0.3cmである。

⑤ 鉄鎌【第17図22】

尖根木葉形、総長86cm、刃巾1.3cm、口巻がある。

(石川恒太郎)

(付説) 古墳の壁画について

以上に述べたように、ここ旭台の地下式古墳においては、13基のうち3基の古墳の玄室の壁に線描の壁画があり、他の1基には羨道の両側壁と玄室の二壁に朱が塗られていた。

このように壁1面に朱を塗った例は、今迄にも例えば東諸県郡国富町飯盛地下式第1号墳（北壁）や宮崎市下北方地下式第5墳（玄室全体）のような例があったが、壁画が発見されたのは今回が最初である。ただ古墳が破壊されて発見されたため、壁画の保存ができなかったことは誠に遺憾であった。しかし壁画が発見された事実は宮崎県の古代史の研究上に極めて大きい意義をもつものである。

さてこれらの旭台の地下式古墳の壁画を見るに、何れもその構図は平行直線、平行斜線または直線を組み合わせたもので彩色も朱1色である。3例のうち2例は簞描きの刻線の上に朱を塗ったものであり、1例は刻線がなく朱で描いたものであった。わが国における装飾古墳は大和国明日香村の高松塚は別格であるが、大部分は北九州に集中している。そして北九州における装飾古墳の数は63基（註1）といわれており、装飾を有する古墳は円墳、前方後円墳、横穴などで、特に横穴式（横口式）石室を有する古墳が多い。そして壁画の文様は円文、重圈文、三角文、蕨手文、直弧文や人物、馬、鳥、船、鞆などの画が多く彩色は赤、黒、緑など多彩である。もちろん直線文や平行直線文もあるが、数は極めて少なく、直線文を有しているのは筑前の王塚古墳と肥後の岩屋古墳、吉本古墳、門前古墳の四基に過ぎず、平行直線文は筑前の王塚古墳と肥後の岩屋古墳の2基で、両者を合せても4基にすぎないのである（註2）。水野裕氏はその著「高句麗壁画古墳と婦化人」（1972、雄山閣）の中で、

北九州の装飾古墳は確かに特異な分布を示している。前節で述べたように、九州においても、筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後の北九州六か国に限られ、今日までなお日向、大隅、薩摩の南九州三か国には、その存在が明らかにされていない。したがって特に北九州西部、有明海沿岸地域に独自の分布を示したこの装飾古墳の文化要素は、南九州三国には全く影響を与えていなかつたし、その文化は南方へ伝播していないということになる。

と書いていられる。しかし今ここに日向国にも装飾古墳が発見されたが、その文化要素はやはり北九州とは異質のもので、水野氏の結論は変わることになる。ただ面白いのは本州に備中1、伯耆1、信濃1、武藏1、常陸4の5か国に8基の装飾古墳があるが、そのうち備中の千足古墳、伯耆の空山第3号墳、常陸の白河内古墳、同国船玉古墳の4基までが直線文の壁画をもっていることである。同じ4基でも北九州のは63基中の4基であり、本州のは8基中の4基（50%）であるから日向の地下式古墳の壁画の示す文化要素は北九州よりも本州に近いということができるよう思われる。

このように地下式古墳というものは、南九州独特の形式をもつ古墳であるが、それは古墳の形式が独特であるばかりではなく、その壁画においてもまた独特の文化要素をもっていることが知られるのである。もちろん今後どのような壁画が発見されるかはわからないが、現在のところ以上のように考えられるわけである。

（石川恒太郎）

註① 水野 裕 「高句麗壁画古墳と婦化人」 P. 165

② 同上書付表 「北九州の装飾古墳」による。

なお小林行雄編藤本四八撮影 「装飾古墳」（1972、平凡社）を参考にした。

IV ま と め

以上高原町旭台で発見された地下式古墳群の発掘調査の結果を記したが、この遺跡は従来発見された遺跡に比べて多くの特徴をもつものであった。それらの特徴は第1にその位置が極めて高所に存在したこと、第2はその形式が玄室を羨道の1方にのみ張出させる所謂「片袖形」のものが多いこと、第3に玄室の壁に柱状のものが造出されていること、第4に玄室その他に朱塗りの壁画を有すること、第5に屍体を取巻く長方形の有機質のものを遺存するものがあったことなどである。

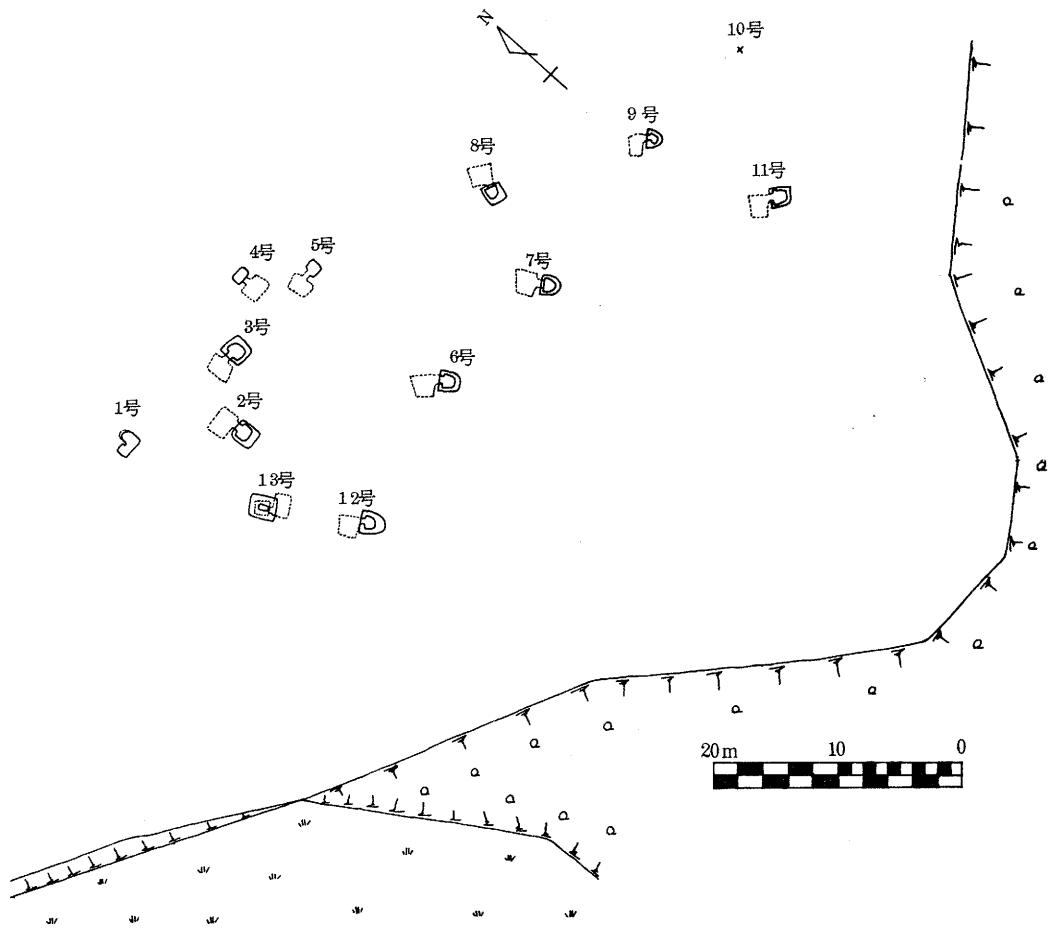
330

第1の古墳の位置は~~290~~ mという高い岡の縁辺部にあって、靈峰と言われる霧島山の高千穂峰を眼の前にし、足下には高原町の部落から遙か下方に野尻町大森の遺跡を俯瞰するところに位置しており、その位置に何か宗教的な神秘さをすら感ぜさせるのである。玄室の構造は大部分がいわゆる片袖造りで、屋根は切妻造または寄棟造の平入りであり、古墳の構造が四角張ったきちょうどめんさを示していた。壁画については別に述べたが、注目すべきことは、ほとんど総ての古墳が玄室に棚状施設をもち、特に壁画を有する第6号、7号、1・2号の3古墳には柱状の造出がある。このような木造建築を表現する古墳内部の装飾は中国の東北(満洲)地方にある高句麗時代の壁画にしばしば描かれている(註1)もので、これらの古墳が装飾壁画を有するのと、何らかの関連を思わせるのである。さらに第2号墳の玄室にあった有機質のものは、図版2の2に示す玄室内の石の奥に見ゆる黒い紐状の切れ切れになったもので、何であるか明らかでないが、全体が長方形で棺の形をしているから、或いは乾漆棺の残りではなかったかとも思うのである。

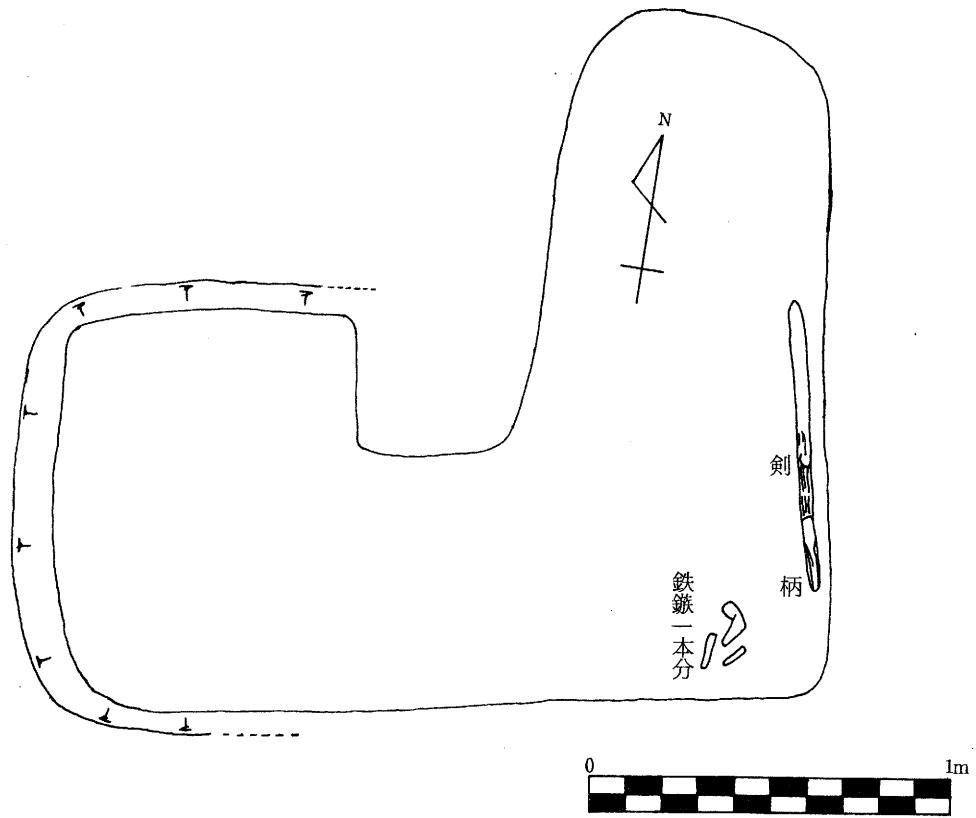
次にこれらの古墳の構造と、副葬品に劍が多く、また鉄鏃はほとんどみな平根で、尖根のものがほとんどないことなどから考えてこれらの玄室を片袖造をしているものは古墳時代後期でも前半に属するものと考えられる。

(石川恒太郎)

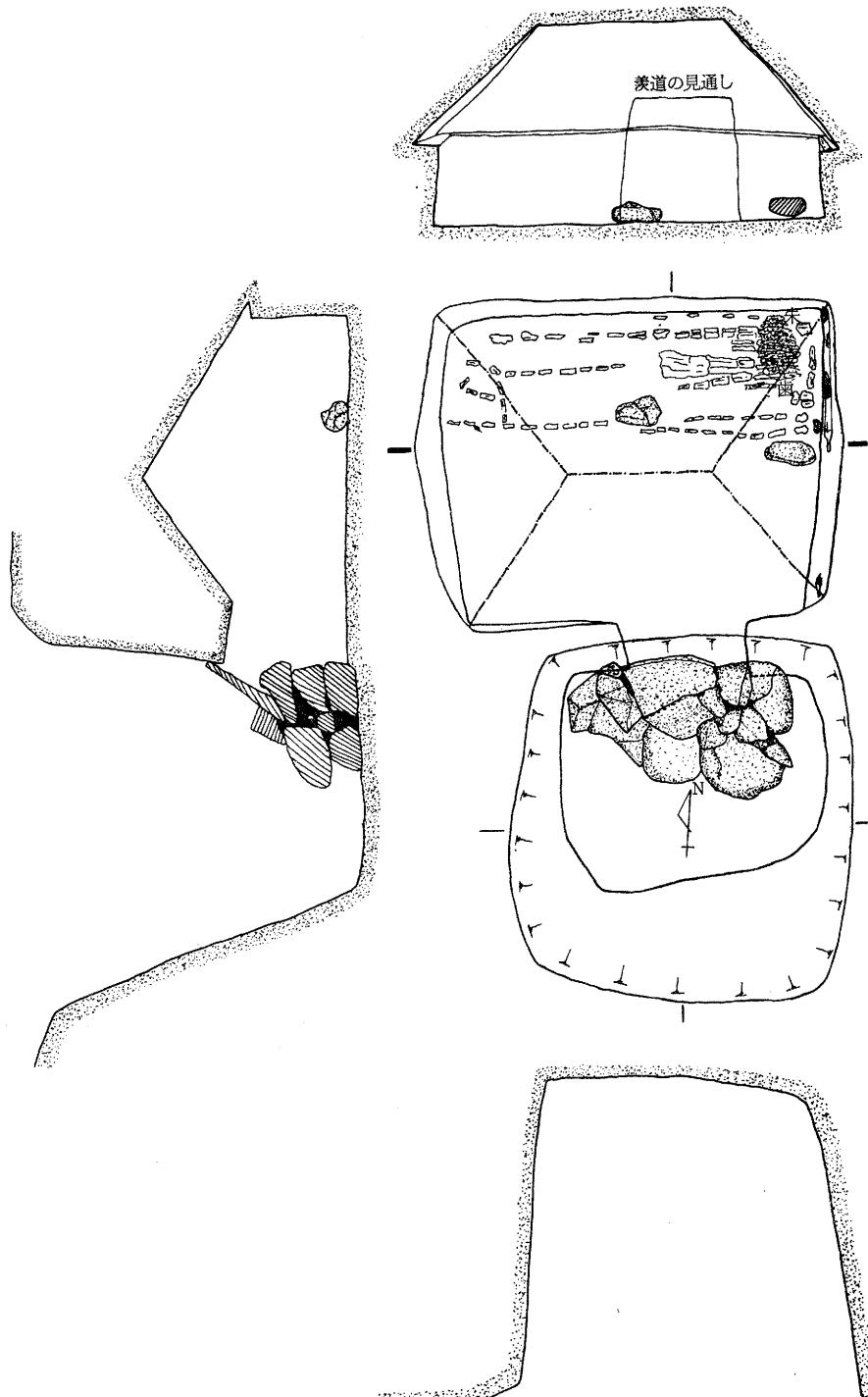
註1. 三宅宗悦氏 「満洲国熱河省葉柏寿付近の遺跡に就て」(考古学雑誌第32巻第1号)



第2図 旭台地下式古墳群分布図

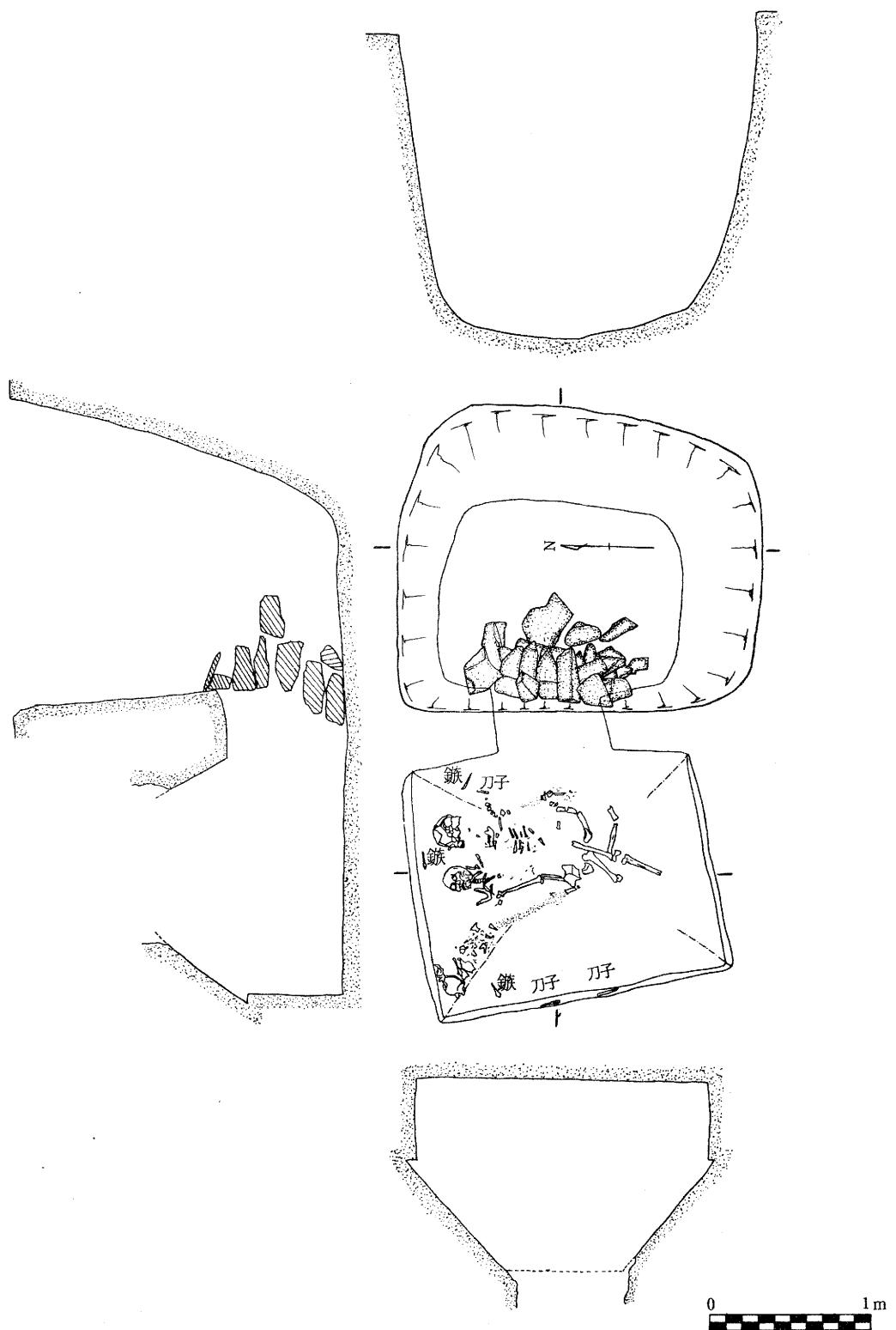


第3図 第1号墳実測図

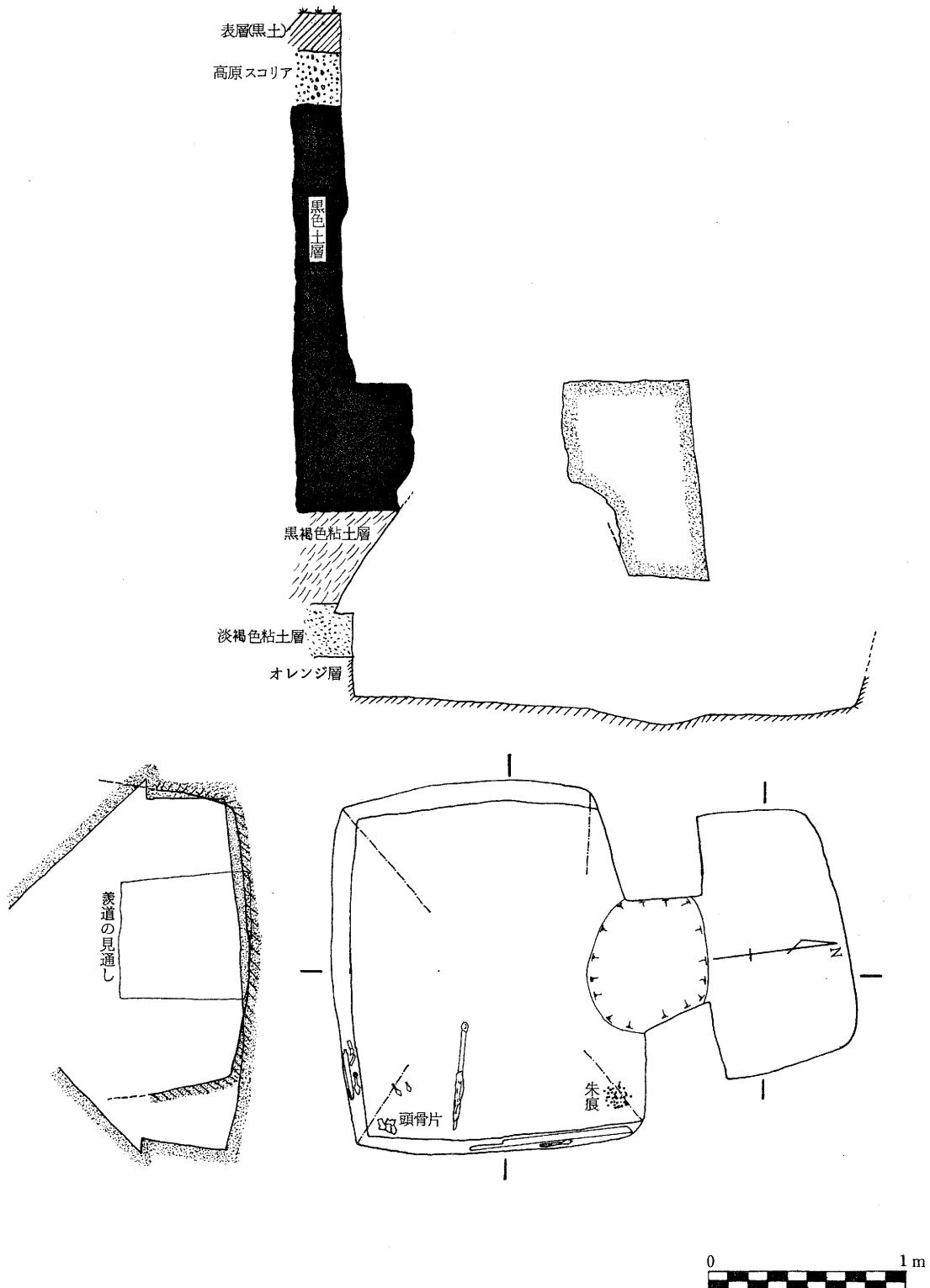


0 1 m

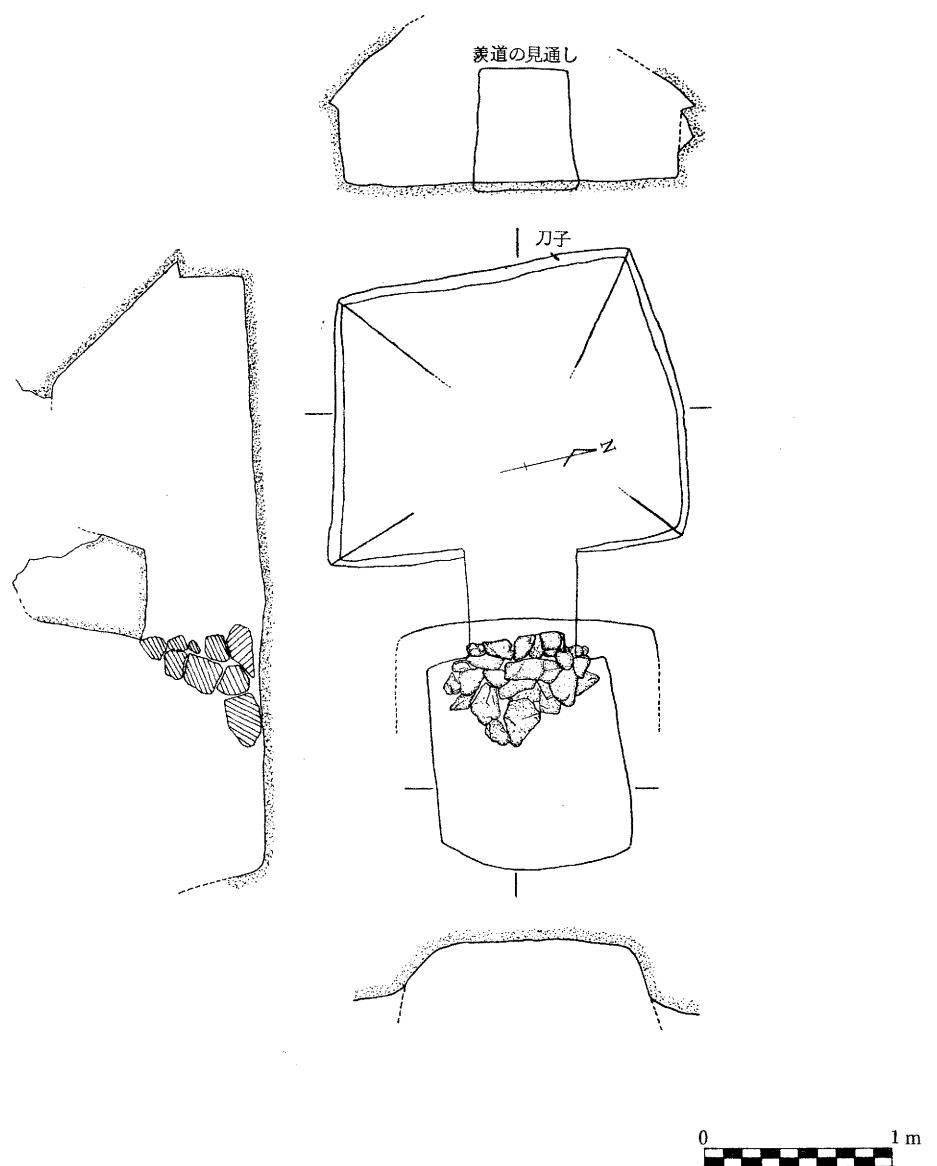
第4図 第2号墳実測図



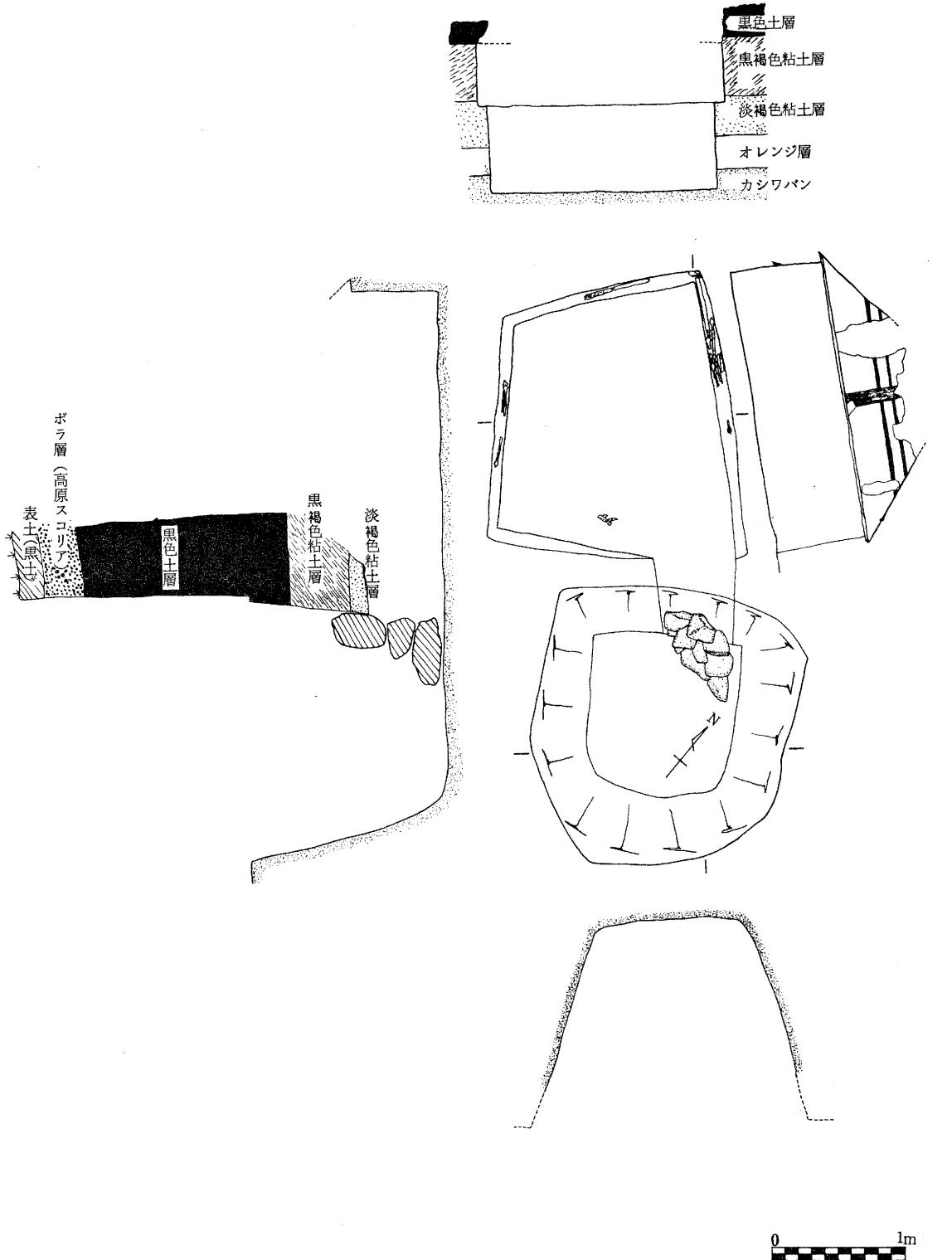
第5図 第3号墳実測図



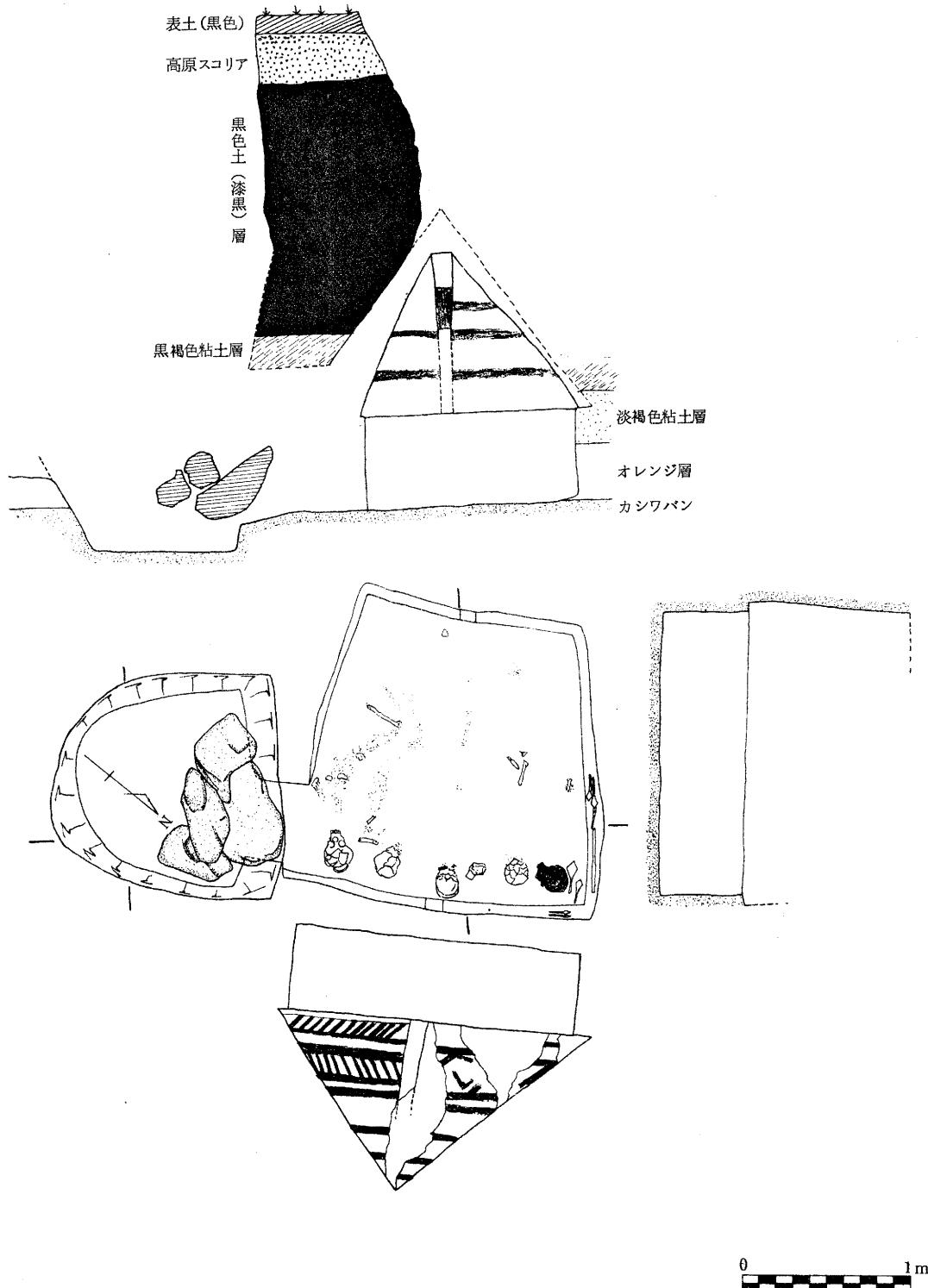
第6図 第4号墳実測図



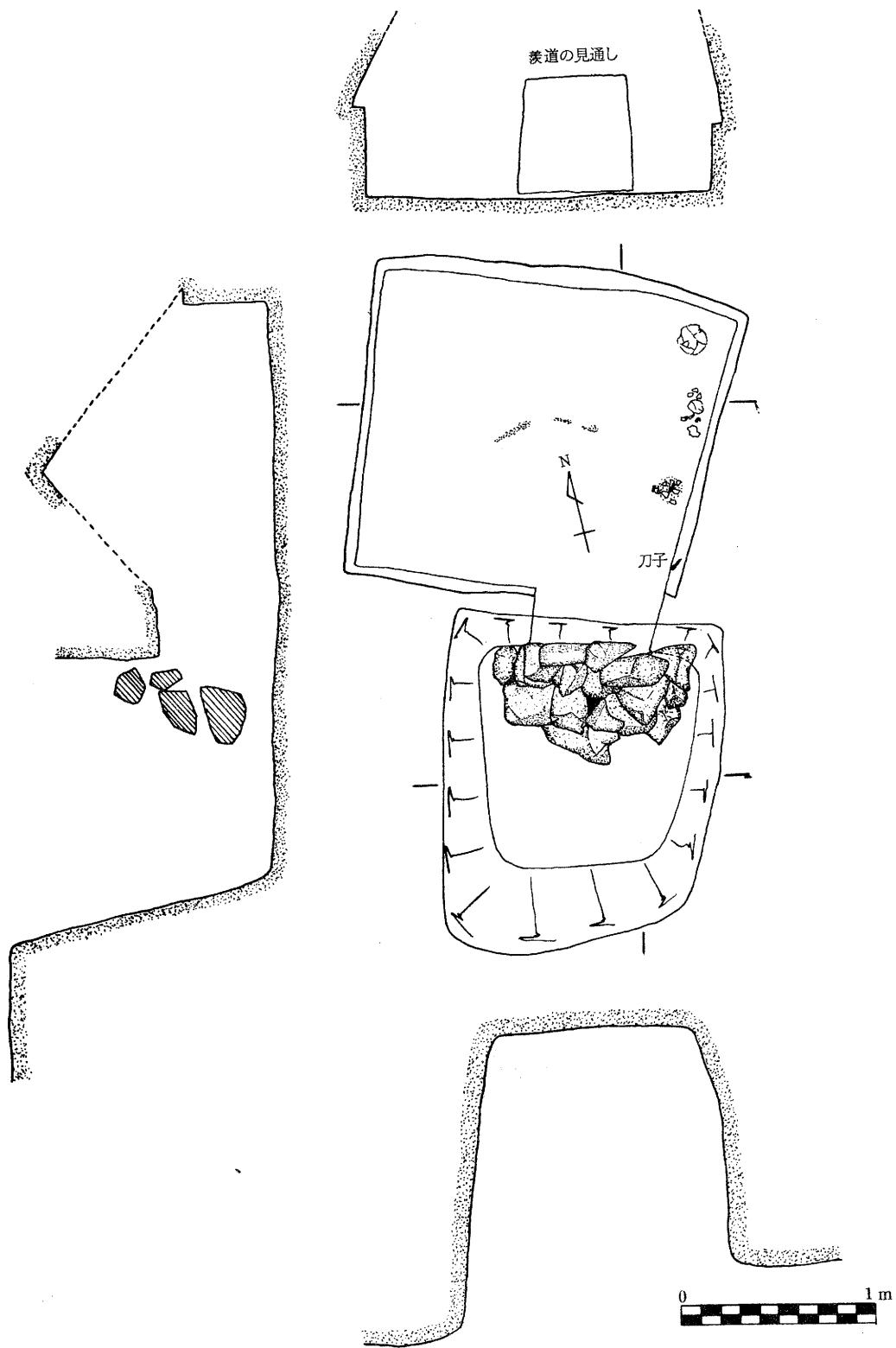
第7図 第5号墳実測図



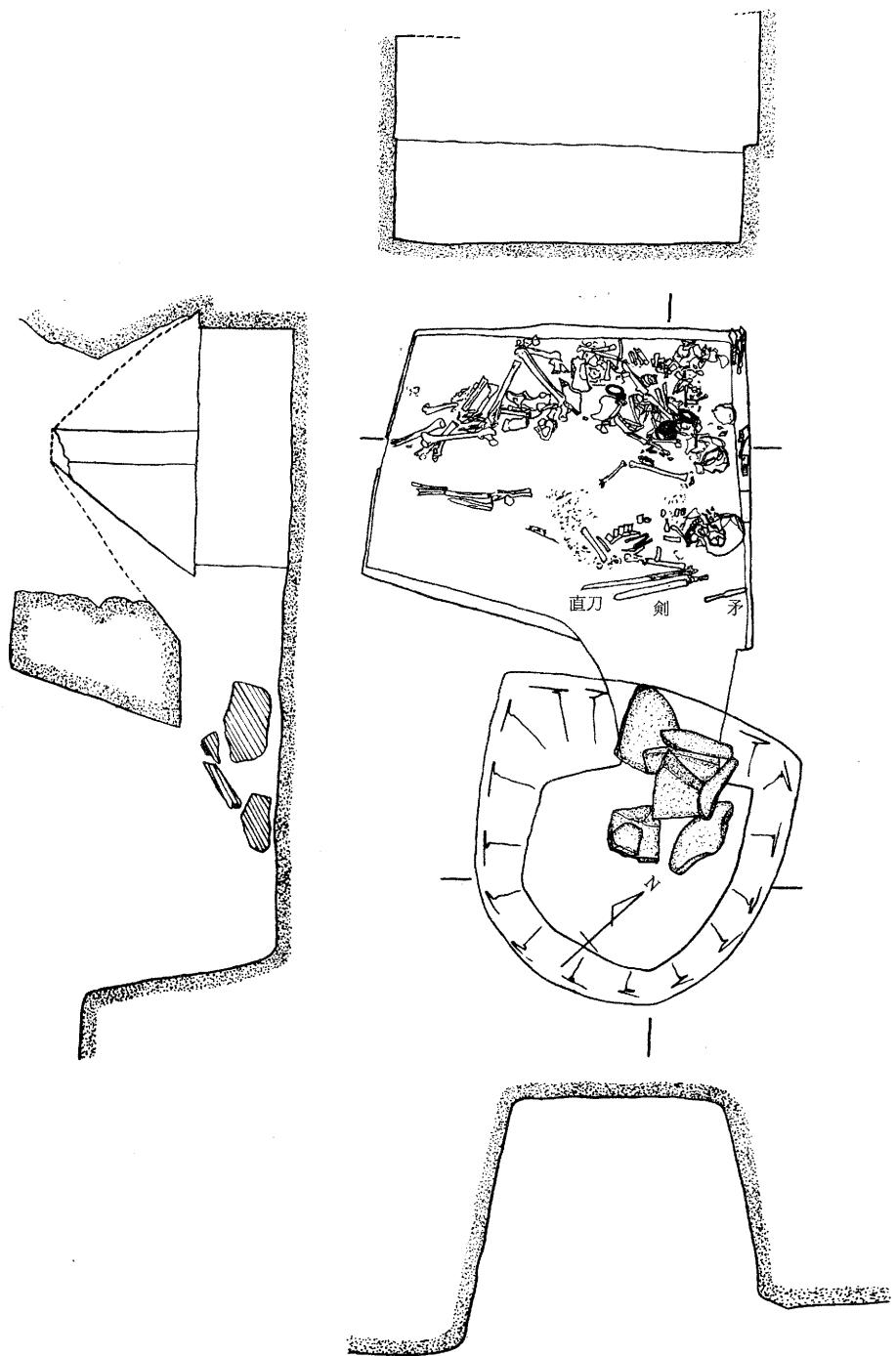
第8図 第6号墳実測図



第9図 第7号墳実測図

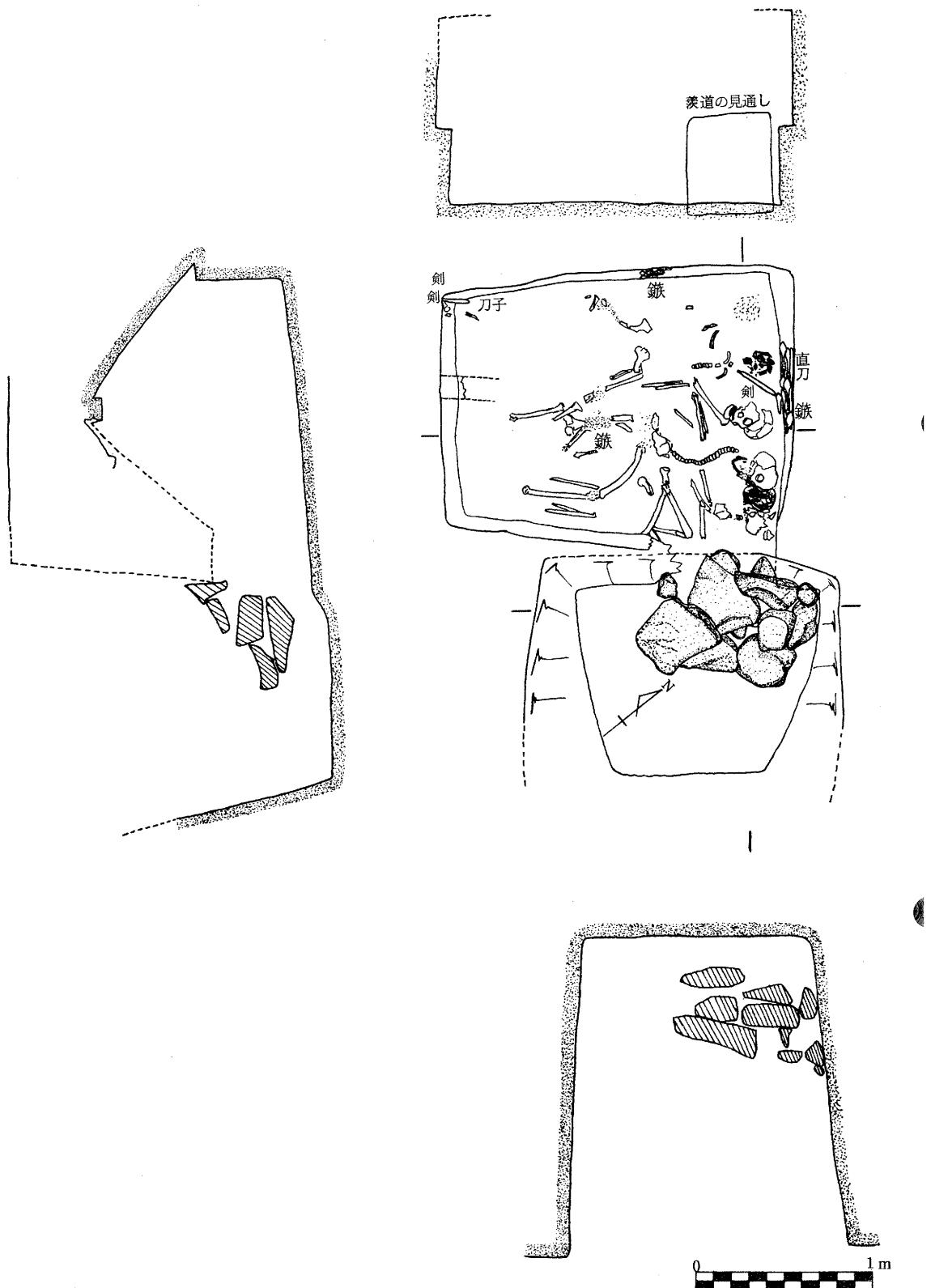


第10図 第8号墳実測図

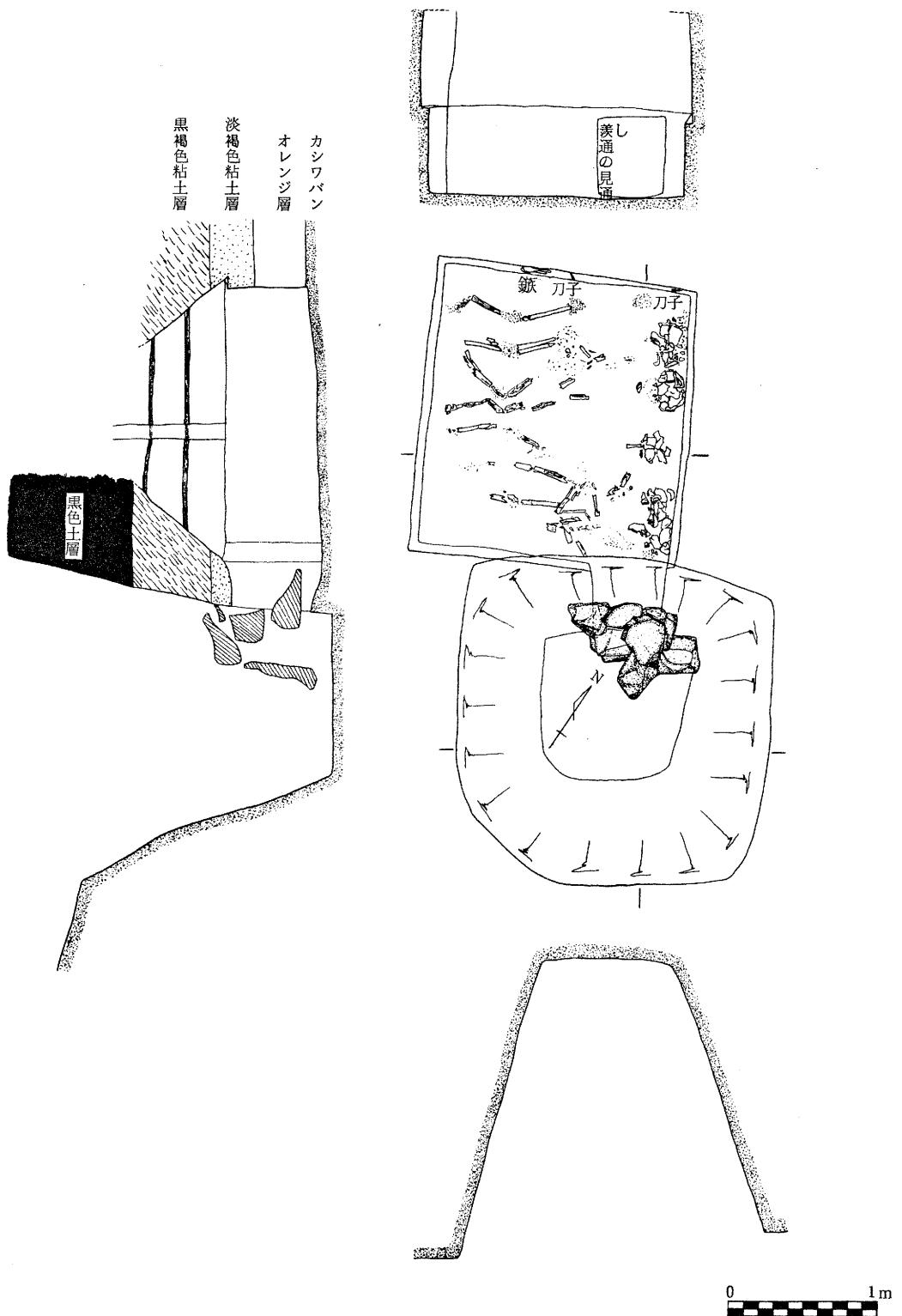


0 1m

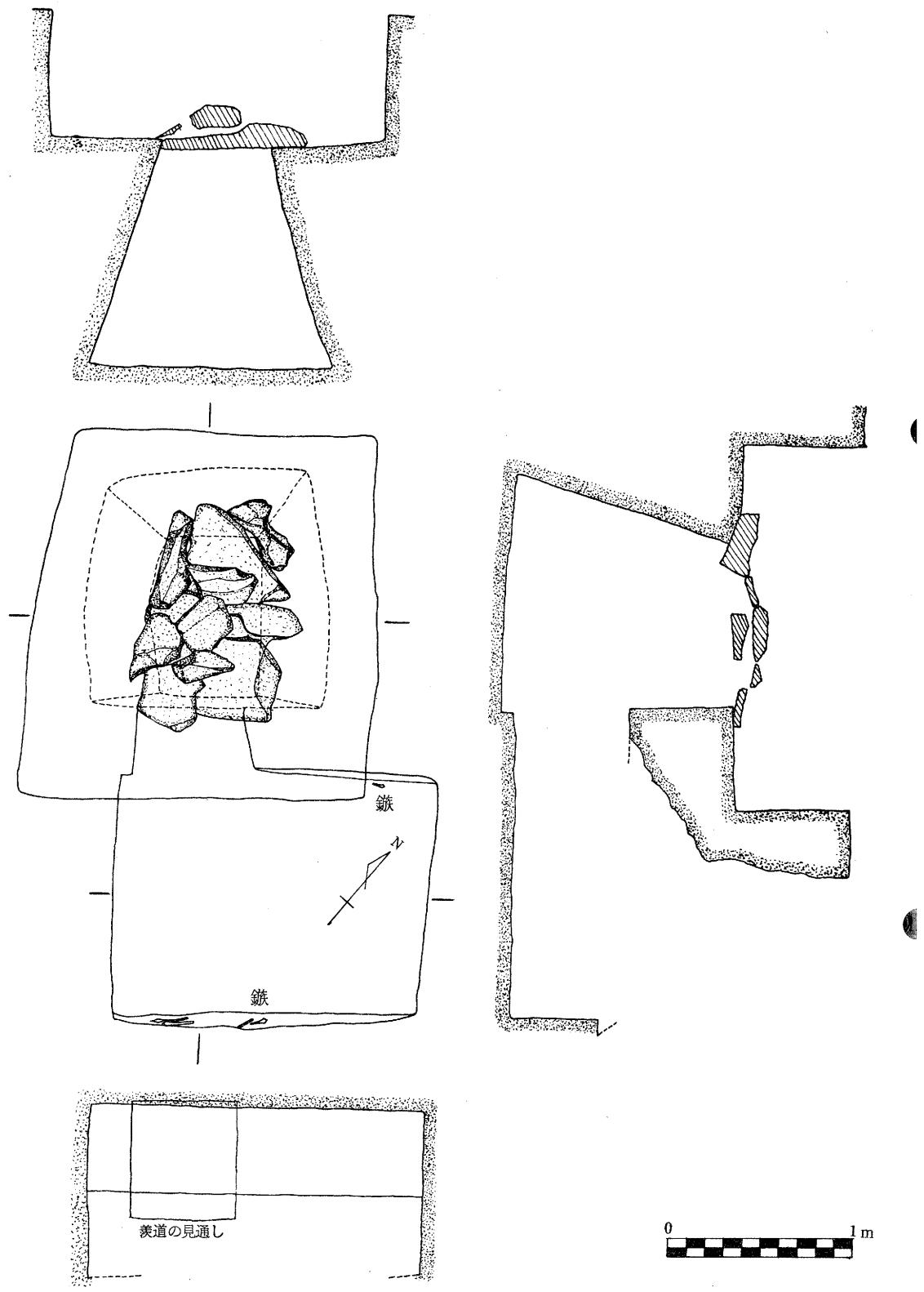
第11図 第9号墳実測図



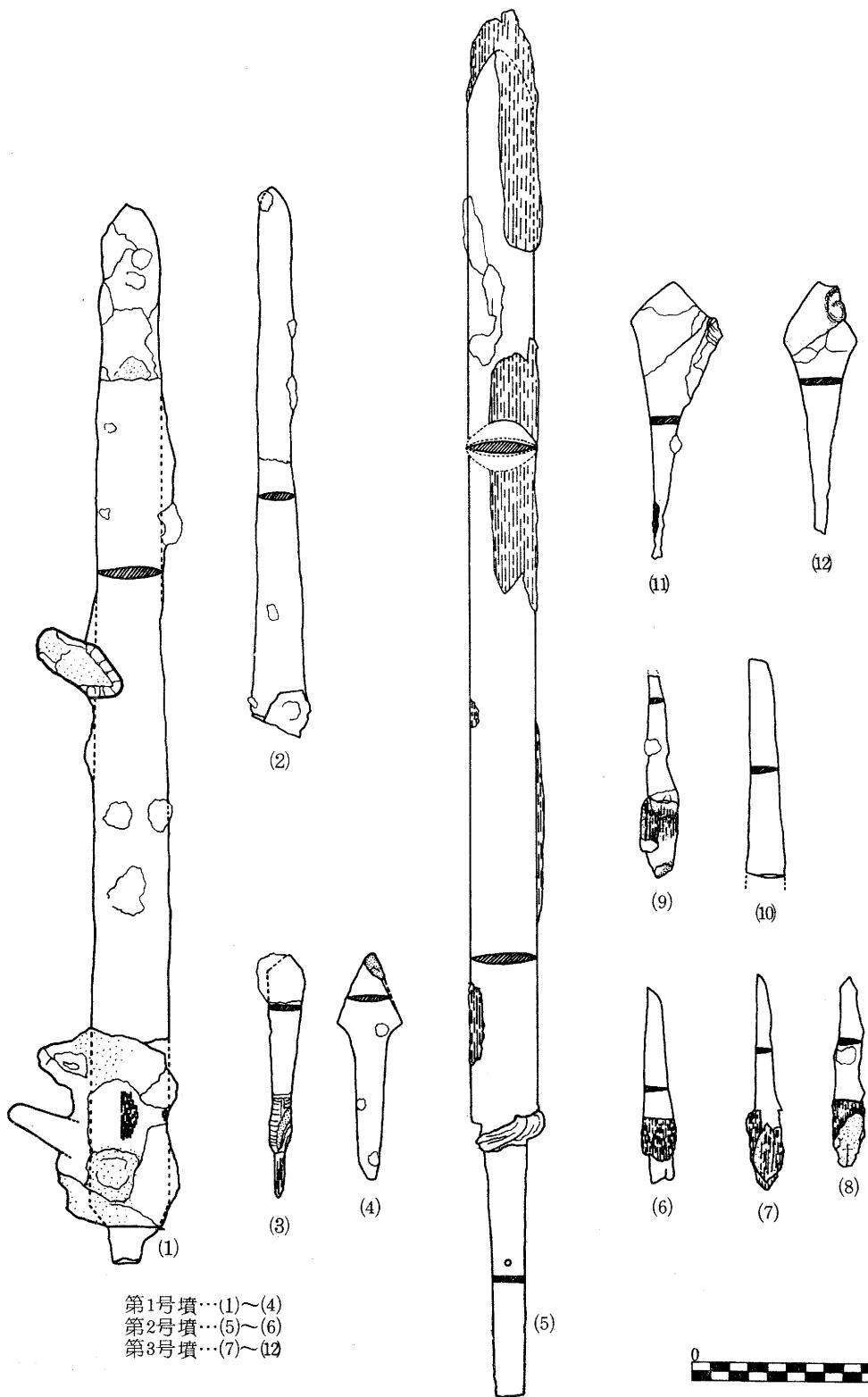
第12図 第11号墳実測図



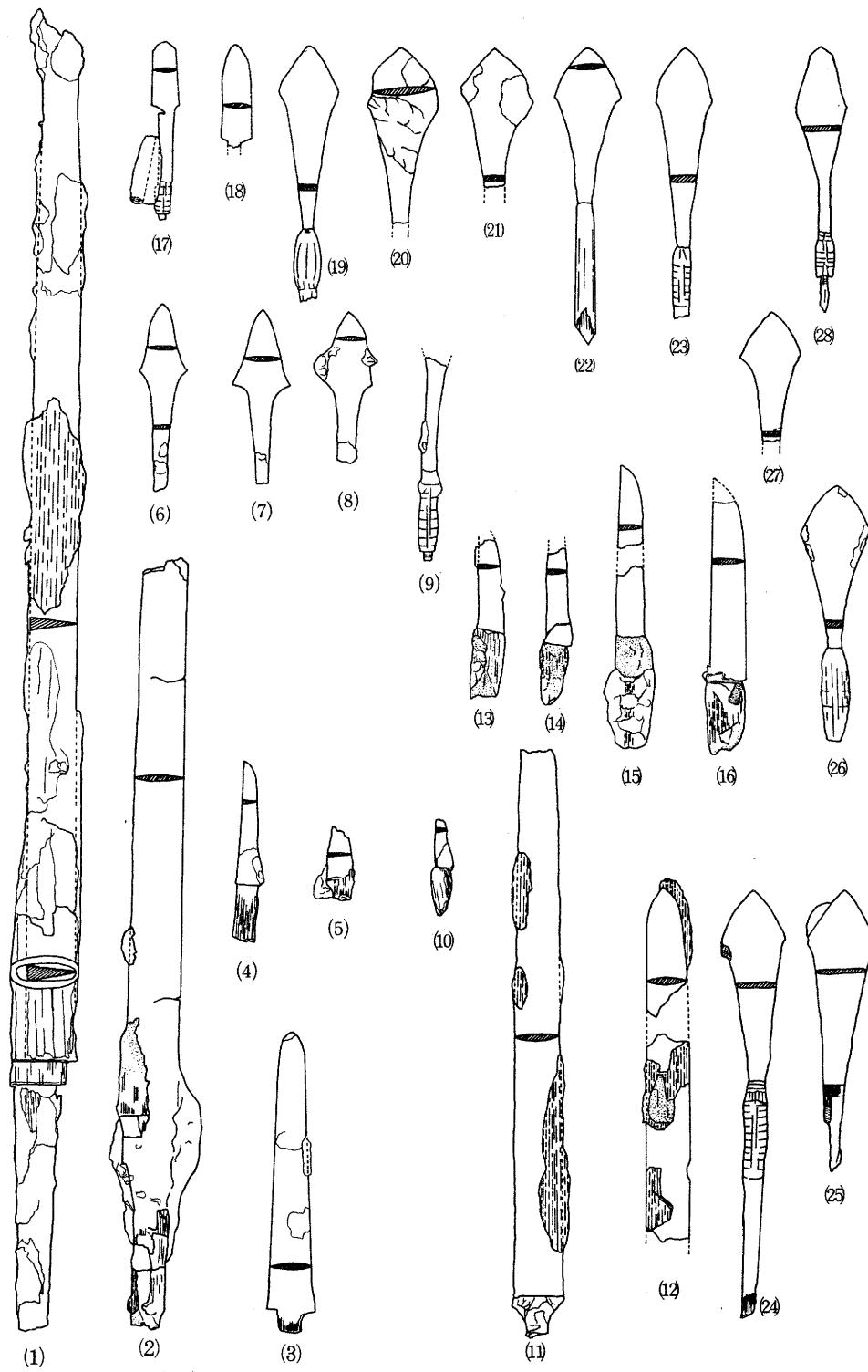
第13図 第12号墳実測図



第14図 第13号墳実測図



第15図 第1, 2, 3号墳副葬品実測図



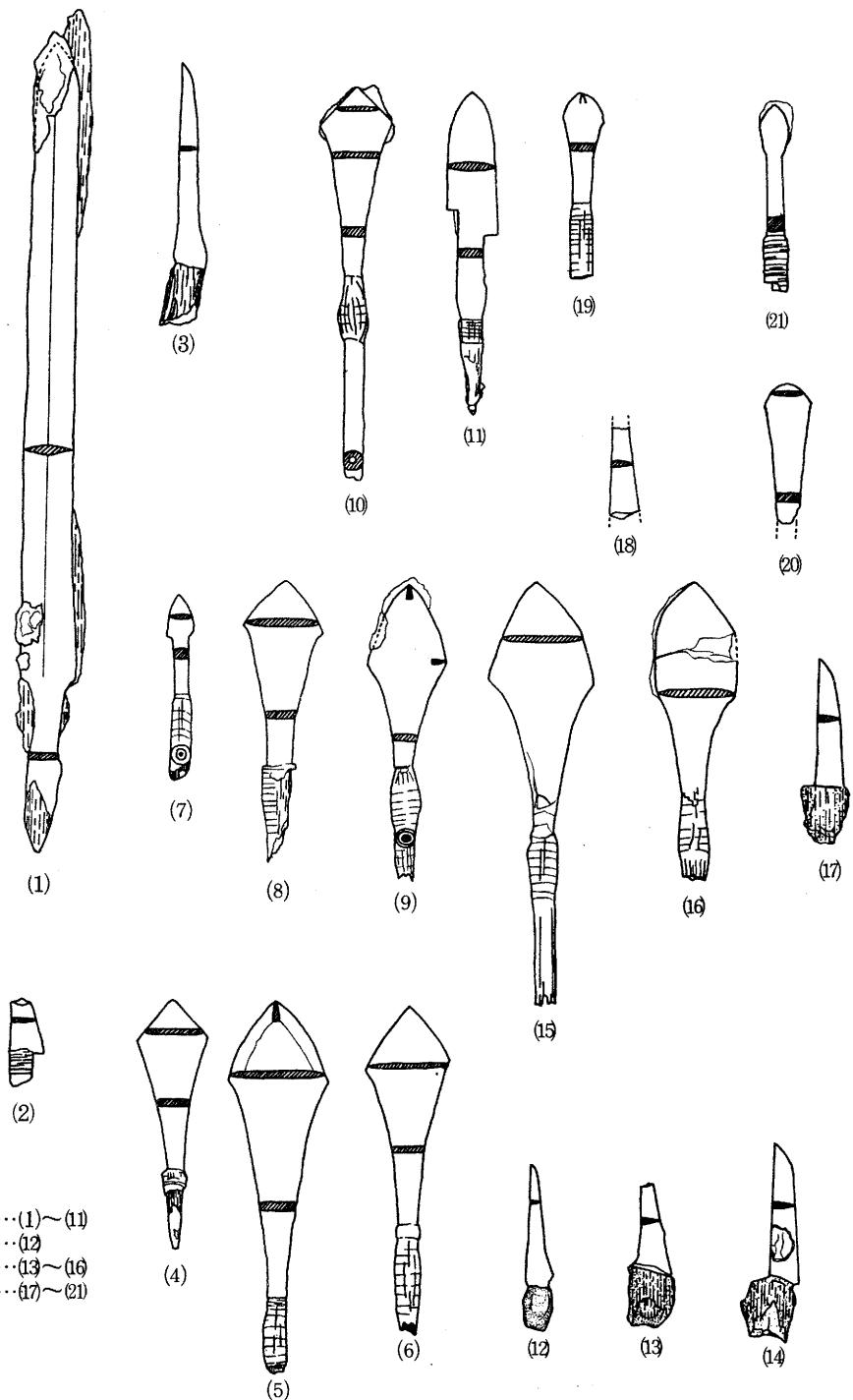
第4号墳…(1)～(9)

第5号墳…(10)

第6号墳…(11)～(28)

0 10 cm

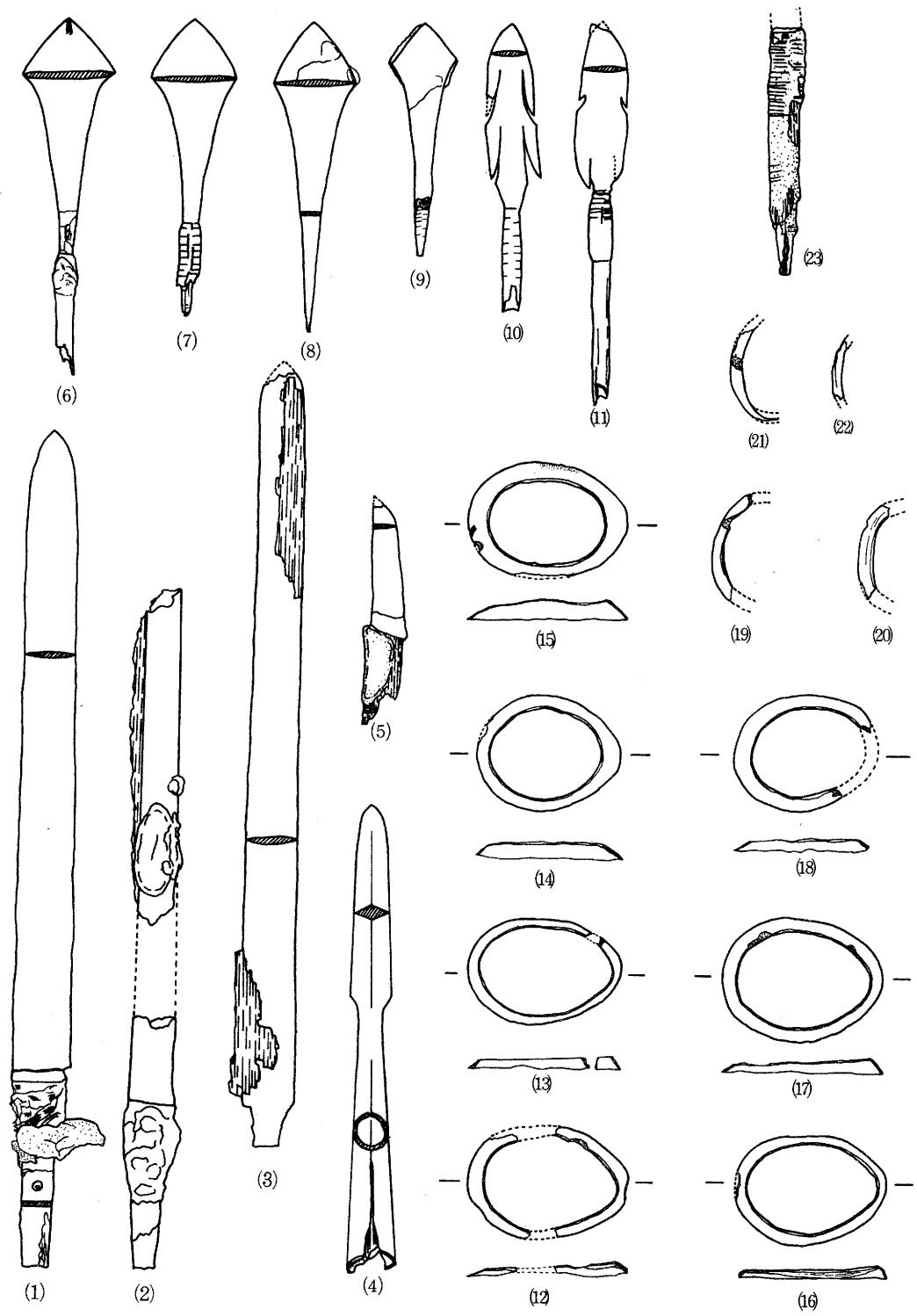
第16図 第4, 5, 6号墳副葬品実測図



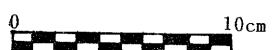
第7号墳…(1)～(11)
第8号墳…(12)
第12号墳…(13)～(16)
第13号墳…(17)～(21)



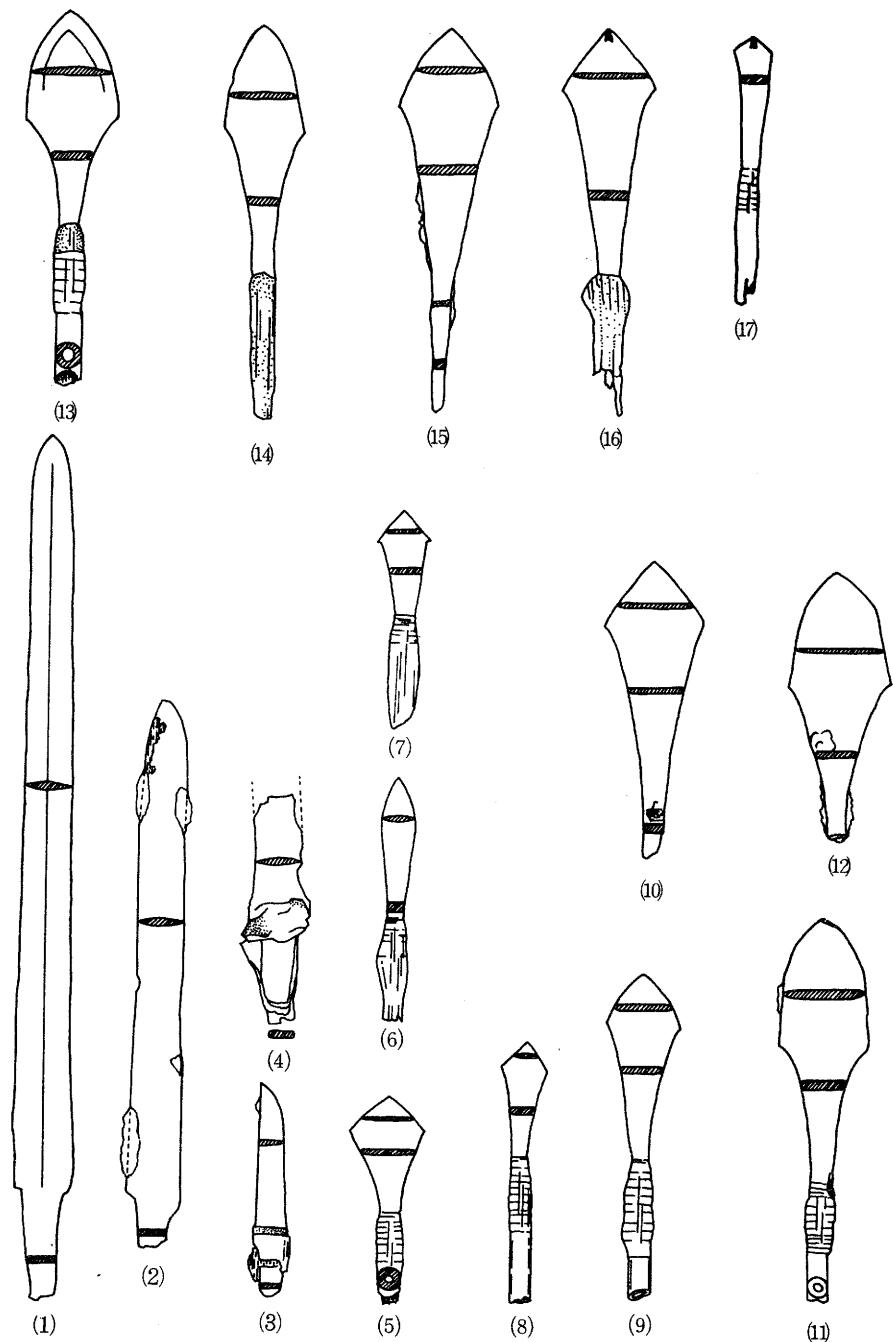
第17図 第7, 8, 12, 13号墳副葬品実測図



第9号墳……(1)～(23)



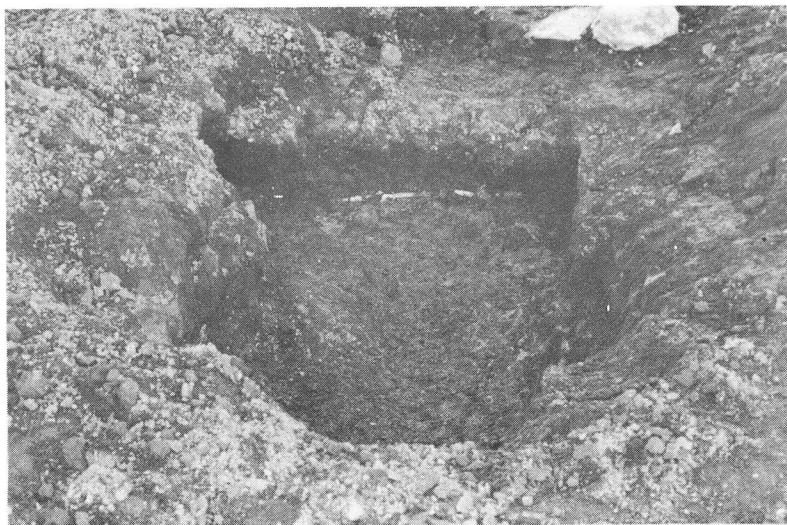
第18図 第9号墳副葬品実測図



第 1 1 号墳……(1)～(17)



第 1 9 図 第 1 1 号墳副葬品実測図

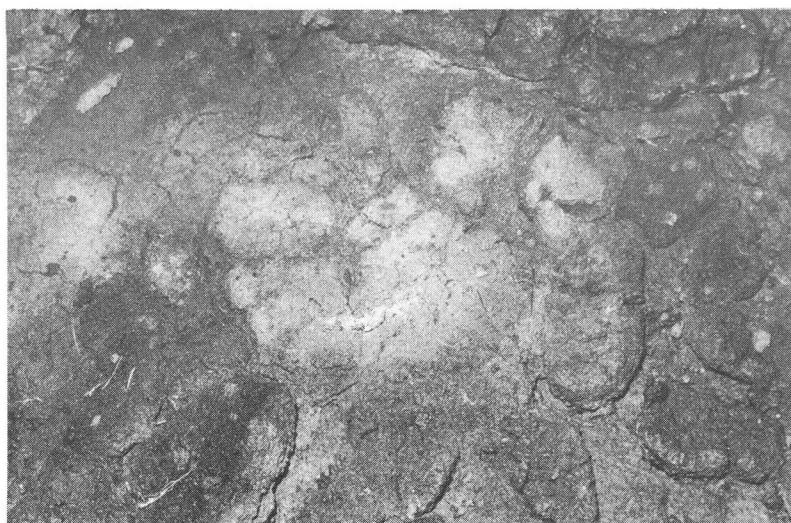


(1) 第 1 号 墓 全 景



(2) 第 2 号 墓 閉 塞 状 況

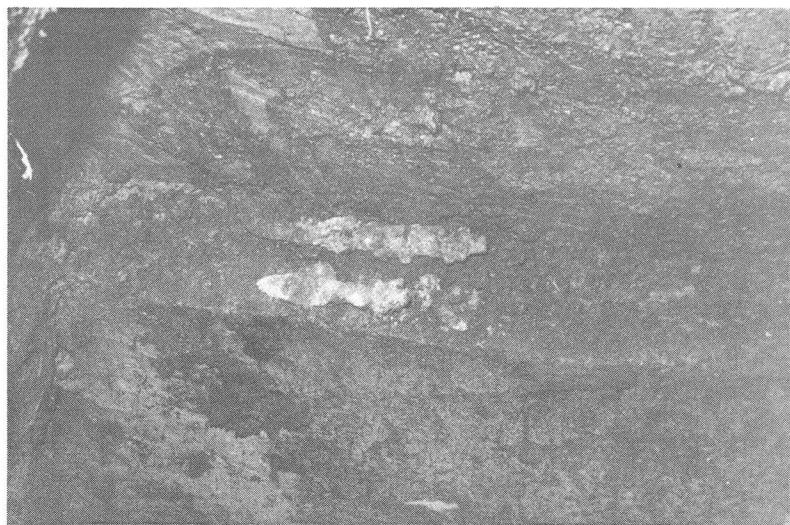
図版 2



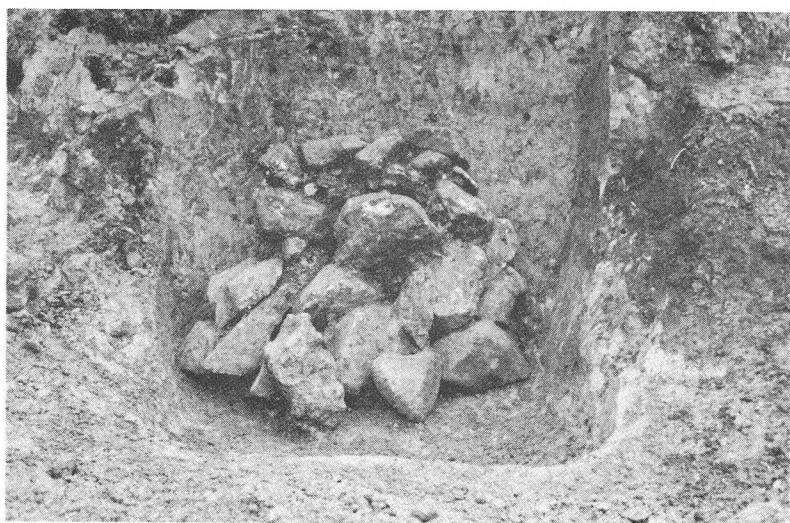
(1) 第2号墳 玄室内人骨頭部付近（歯のみ残）



(2) 第2号墳 玄室内床面



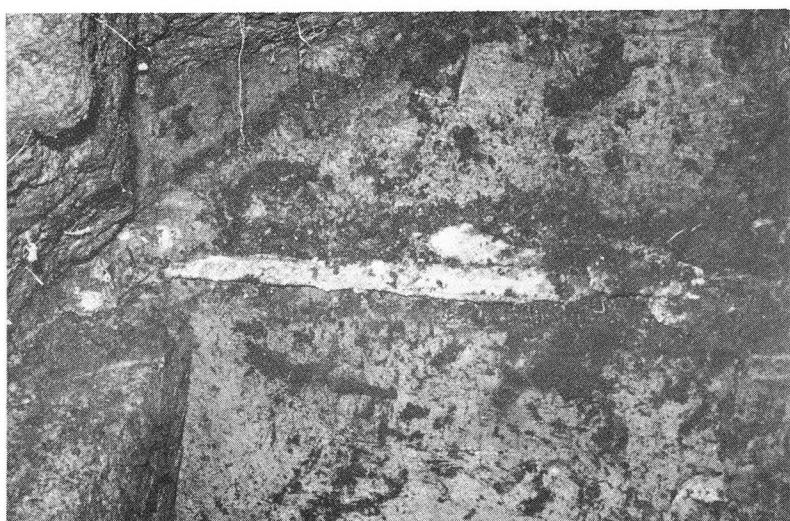
(1) 第4号墳 玄室内遺物出土状況



(2) 第5号墳 閉塞状況



(1) 第6号墳 閉塞状況



(2) 第6号墳 玄室内たなの剣と鉄鎌



(1) 第6号墳 玄室壁画（右壁）



(2) 第6号墳 玄室壁画（左壁）



(1) 第7号墳 玄室内部（上から）



(2) 第7号墳 玄室内壁面柱造出し



(1) 第8号墳 閉塞状況



(2) 第8号墳 玄室内刀子



(1) 第9号墳 玄室内人骨



(2) 第12号墳 閉塞状況

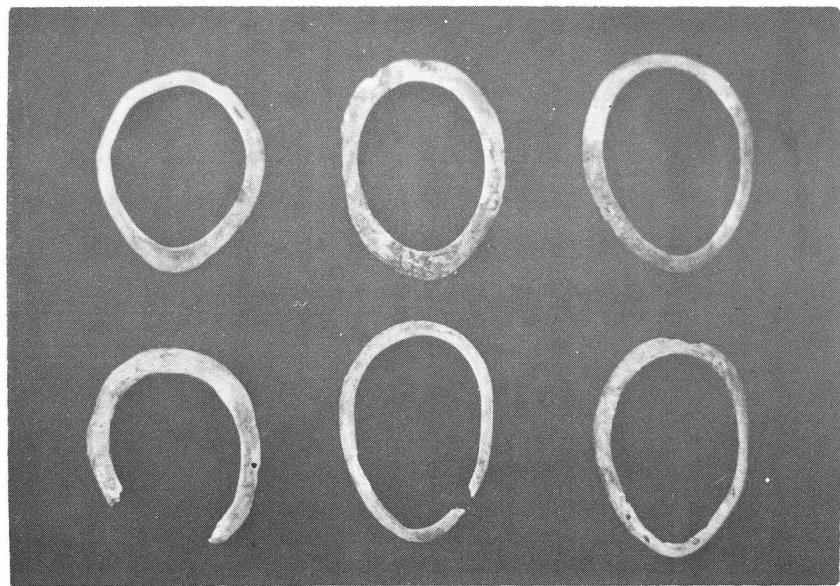


(3) 第13号墳 閉塞状況(竪坑上部閉塞)

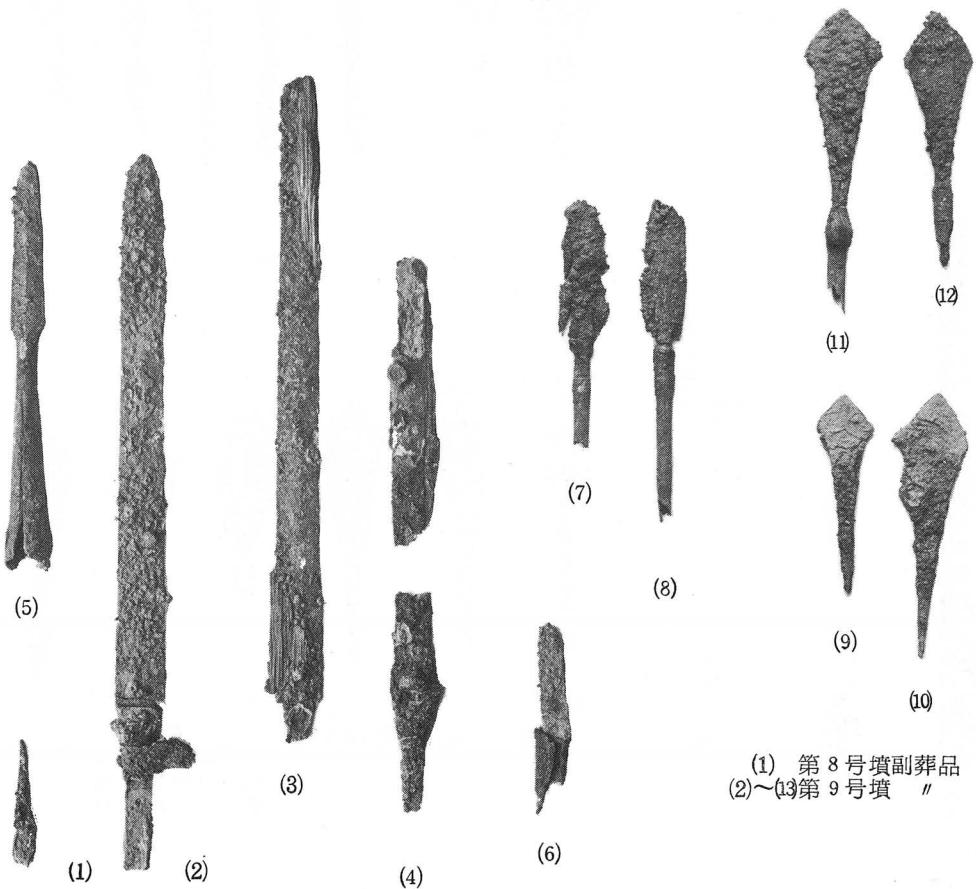


図版 10

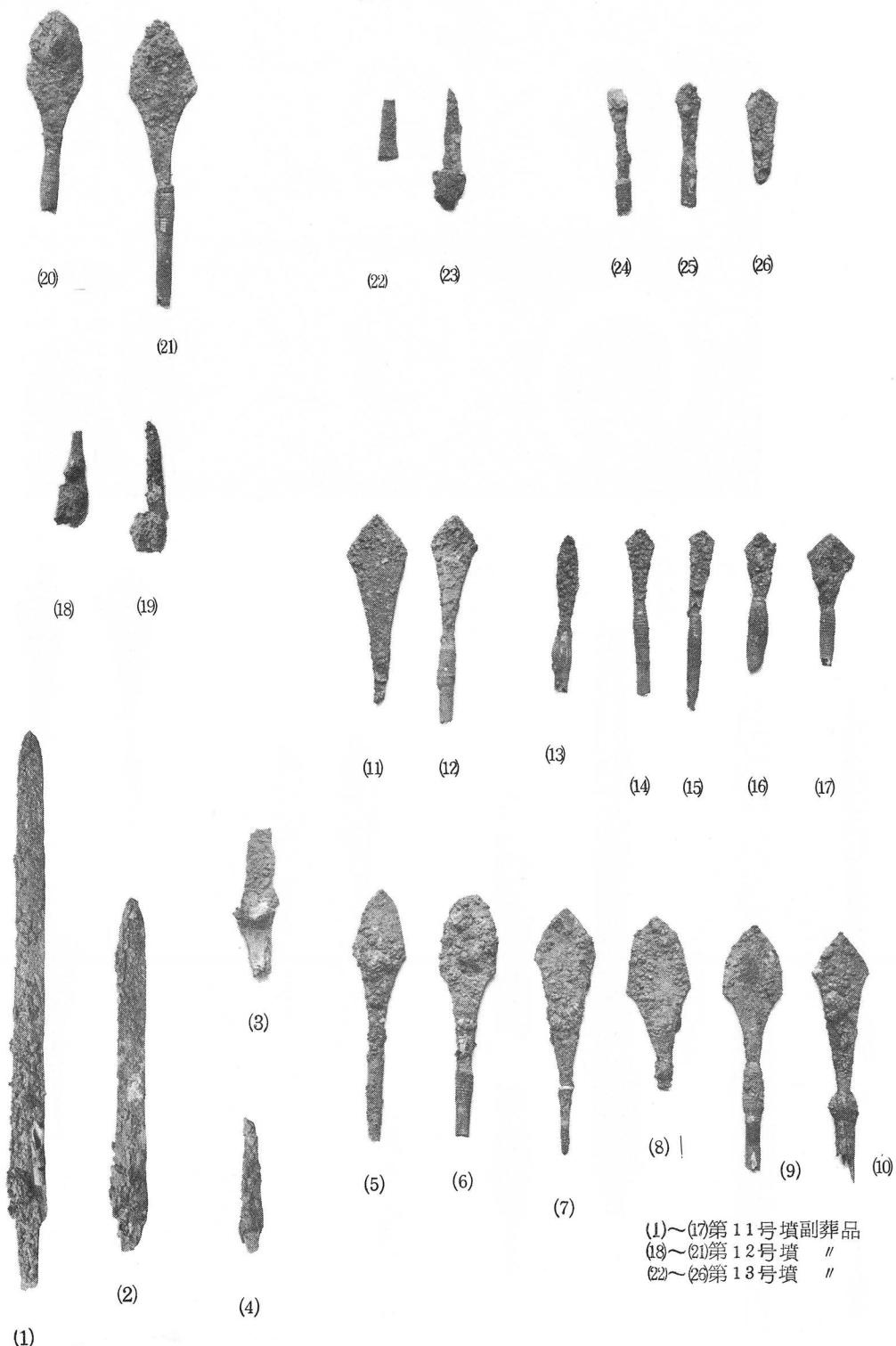




(13)



図版 12



II 下水流地下式墳発掘調査

都城市下水流町築地

県文化財保護審議会委員 日高正晴

本 文 目 次

I はじめに	51
II 内部構造	51
III 出土遺物	52
IV まとめ	52

挿 図 目 次

第1図 (1) 下水流地下式墳実測図	53
(2) 副葬品実測図	53

図 版 目 次

図版1 下水流地下式墳副葬品	55
----------------------	----

I はじめに

昭和48年3月27日、県教委から連絡があり、都城市志和池の下水流字築地地区に地下式墳が発見されたので調査にゆくように依頼があったので、その日のうちに現地に急行し、遺跡を確認の上、翌28日朝から都城市社会教育課の宮丸実氏、それに、肥田木重文氏、児玉三郎氏、鳥集忠雄氏らの協力の下に、発掘調査を始めた。この地下式墳が発見された地点は大淀川の左岸、志和池の下水流台地に点在する志和池古墳群地帯であり、その付近には早馬塚古墳をはじめ6基の古墳が認められる。この台地は大淀川を挟んで高城町石山に相対しており、志和池古墳群と高城古墳群とが東西の同一線に展開しているわけである。ところで、この下水流地区では、これまでにも、度々、地表面が陥没して、地下式墳が発見されたことがある。

II 内部構造

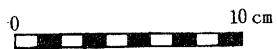
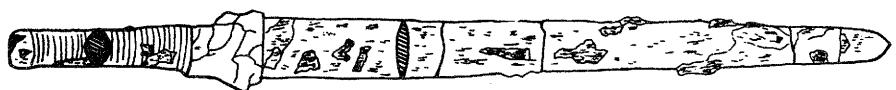
地下式墳が発見された陥没穴は竪穴部分の一部だったので、そこを中心に崩土の土揚げを進めた。この地点の層位は地表面下約30cmに第一層としての黒色腐蝕土層があり、さらに、その下層は第2層のボラ層になっている。そして、この第一層下1.4m下部が玄室の床面となっている。発掘現場の地表面は、すでにブルドーザーによって削平されているので、玄室床面から原地表面までは2.2mとなる。なお、本墳の発掘調査で、第一層の黒色土層の土壤を振り揚げている際、その層の下部から弥生式後期から末期にかけての小土器片約30ヶ、須恵器片3ヶが検出されたが、これらの土器片は本地下式墳とは直接、関連がないようであり、別個な資料として取り扱った。なお、竪穴部分は地形の関係上、発掘することが無理であったので、玄室と羨道のみ調査することにした。玄室は第2層のボラ層中に掘削されており、その形状も、もういボラ層のため、壁面が崩壊して不整形な形に変化している。また、玄室内部には何らの施設もなく、床面には敷石も全く、見られない。玄室の方位は主軸に沿って東10度北となっている。その平面プランは奥壁側の両隅が、わずかに、角を残して丸型となり、西側の両隅は北側の角隅だけ、少し、入り込みを造り、南側の隅は、そのまま、直線に羨道の側壁に続いている。それで、羨道も幅広いものになっているが、羨門部分で最も狭くなり、いわば、口を締めた袋状の形態をとっている。しかし、前述したように羨道部は崩れ易いボラ層のため側壁が剥落しているので、その原形は方形の玄室であったように思われる。さらに、その中央部に羨道が開口しており、その幅も76cm～80cmと推測される。なお、羨道の高さは、羨門部で約90cmとなっている。玄室の奥行は中央部で、1.35m、横幅1.62mあるが、天井の高さは1.15mとなっている。また、玄室床面に安置されている被葬者の下に約2cm厚さで横幅27cmのくり抜き状で蓋のない木棺らしき木質部分の残片が確認されたが、その深さは約7cmあった。

III 出 土 遺 物

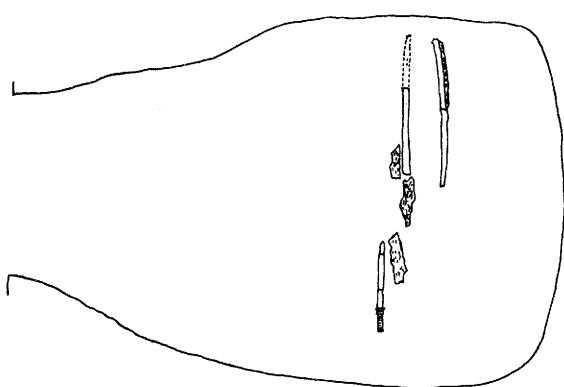
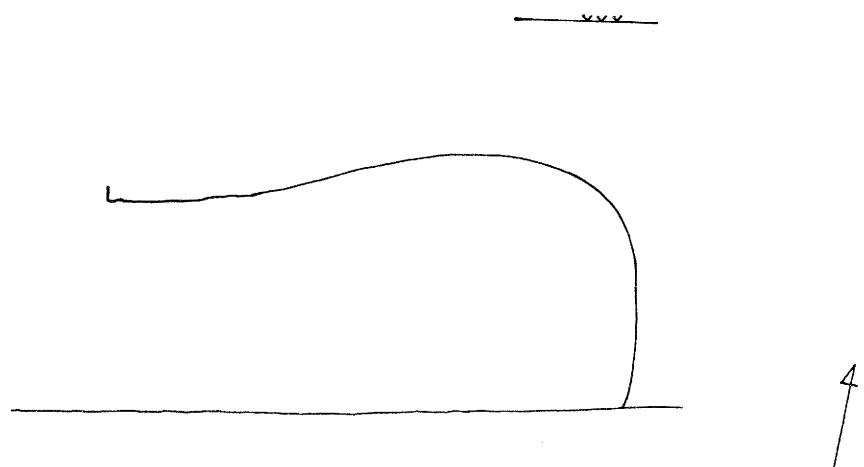
本墳の副葬品としては、鹿角装の剣が一振、玄室中央部のやや南寄りに、発見されたのである。剣は人骨が納置されている場所、すなわち、被葬者のすぐ西側約10cmの地点に副葬されていた。この剣は把の部分で1ヶ所、剣身で3ヶ所折れているが、接合すると完全なものになる。さて、鹿角製剣装具であるが、把頭の鹿角装具は欠損しているが、把縁のそれは、ほとんど、遺存している。そして、把全体に細い纖維物で巻き締めてあるのが十分確認できる。ところで、剣身は鋒の方で2ヶ所と、中央部から少し、闕の部分に寄った所で1ヶ所折れているが、接合すると原形に復すことができる。把縁の鹿角製剣装具は長さ3cm、幅は鞘口で、3.6cm、把の径は1.1cmある。剣身は長さ277cm、身幅は闕の部分で2.8cm、鋒で1.2cm、となっているが、身の厚さは4.5mmある。なお、剣身には所々に鞘の木質片が、わずかに認められる。

IV ま と め

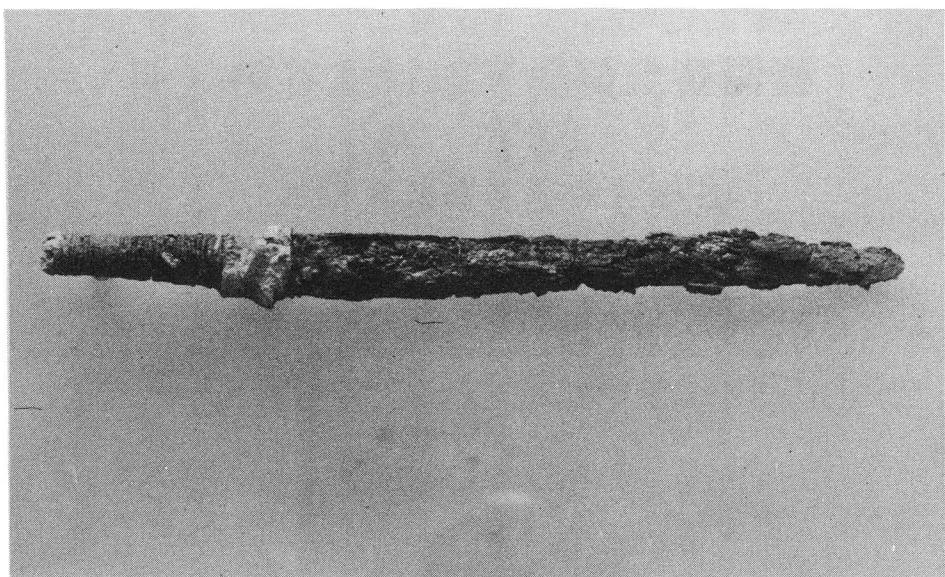
以上、下水流に発見された地下式墳の内部構造、および、副葬品などにつき考察してきたが、玄室が方形状を呈していることと、羨道も、かなりの長さに掘削されていることは、地下式墳の原初形態から多少、年代的に経過したものと推定できるが、副葬品として、1点ではあるが、鹿角装の剣が発見されたことは中期古墳の形式を保つものであり、その点を考慮に入れた場合、編年的には5世紀末前後に比定されそうである。



(2) 下水流地下式墳副葬品実測図



第1図 (1) 下水流地下式墳実測図



下水流地下式墳副葬品

III 横谷原村地下式墳発掘調査
(A・B号)
北諸県郡高崎町横谷原村

県文化財保護審議会委員 日高正晴

本 文 目 次

A号墳	59
Iはじめに	59
II内部構造	59
III出土遺物	60
IVまとめ	63
B号墳	63

挿 図 目 次

第1図 A号墳実測図	65
第2図 A号墳副葬品実測図	66
第3図 B号墳実測図	67

図 版 目 次

図版1 A号墳の状態	69
図版2 (1) A号墳玄室内部	70
(2) A号墳副葬品	70
図版3 A号墳副葬品	71

A 号 墳

I はじめに

昭和45年2月2日、県教育委員会から連絡があり、高崎町原村地区で行われている土地改良工事中に地盤が陥没し、地下式墳らしきものが現出したので発掘調査を進めるようにとのことであった。その日の夕方5時頃、現地に到着すると、すでに、県教委の加藤成男氏、阿部邦広氏それに、町教委の黒木昭三氏らによって、崩土の除去作業が終り、竪穴部と玄室は確認できるようになっていた。さて本墳の発見された地点は高崎町有水から高崎町に通ずる道路が国道と交差して三角形に区切られている地区であり、その現場の土地所有者である上原マルエ氏の畑を水田改良工事のため、高崎町役場職員の安楽兼行がブルドーザーで造成作業中に、その振動により地盤が落ち込んだのである。高崎町では以前にも地下式墳が確認されているが、特に、塚原地区からは、たびたび、発見されている。

II 内部構造

発掘現場の地表面は、すでに、ブルドーザーによって約55cm地盤が下げられており、さらに、その地表面下約30cmまで、すなわち、原地表面から約85cm下までが黒色土層ということになっており、さらに、その下層が、この地方特有の粒子混りの黄褐色ボラ土層となっている。本墳の竪穴および、玄室はこのボラ土層に造られている。玄室の主軸の方位は北30度西であり、羨道は西南の方向に開口し、玄室の東壁面寄りに羨道がついている逆P字形のプランをした地下式墳である。玄室の形状は主軸に対して直角に、やゝ、長方形状を呈し、奥壁に接した両隅は角張っている。それに対し、西側の角隅は丸みをおび、さらに、東側の隅は、わずかの区切りを残して羨道につながっている。玄室の床面は羨門付近から約15cmゆるやかに下っている。なお、玄室内には何らの遺構も認められなかったが、遺物の副葬状態は以下述べるようになっていた。まず、玄室東壁に沿って4体の頭蓋骨がおかれ、それぞれの頭蓋骨の下部に大腿骨、脛骨が納置されており、また、中央の人骨の中には脊椎骨も残存していた。副葬品は玄室の奥壁の東側に沿って平根式鉄鏃7本、それに、尖根式鉄鏃4本が検出され、さらに、その地点から欠損している剣が4本発見された。また、玄室の東側壁で羨道に近い地点と中央部人骨下に、合わせて10本の刀子が発見された。また、中央部人骨の両下脛骨には貝釧がはめられていたが、さらに、右下脛骨の下から鉄釧1ヶが検出された。玄室の奥行と横幅は中央部で、それぞれ、1.55m、と1.88mある。天井部は中心部が崩壊しているので高さは明かでないが、残存している天井の一部から推定されるところでは丸みをおびた切妻式の屋根形をしていた。玄室の天井部が崩れているので原地表面から床面までの正確な深さは測定できないが、推定によると約2.3mとなる。

羨道は玄室の東側から細長く延びており、また、羨門は約30cm～約40cmの長さの軽石40ヶと丸い川原石3ヶ計43ヶによって閉塞されていた。羨道の長さ1.6m、幅は中央部で0.75m、高さ、羨門部で約0.5

m となっている。さらに堅穴は奥行1.45m, 幅1.35m, それに、深さは原地表面まで2.28mとなっている。

III 出土遺物

(1) 鉄 鎌

本墳出土の鉄鎌は玄室の東北部、奥壁付近にかたまって副葬されていた。床面の土質がこの地方特有のボラ土であったため、遺物の保存度も比較的良く、さらに鉄鎌は有茎であり、その茎には、それぞれ、矢柄の残片が遺存していた。矢柄は一部分であるが、すべての鉄鎌に付着しており、茎にさし込まれた矢柄の部分は樹皮によって巻き締められいる。

1. 鉄鎌（図1）（写真1）

平根式定角形の鉄鎌で身は錆化しているが、殆ど、原形を保っている。

鎌身の長さ、14cm, 鎌身の最広部幅3.2cm, 身厚3mm（中央部），矢柄の残存部分の長さ2.6cm。

2. 鉄鎌（写真4）

平根式定角形の鉄鎌であるが、身、矢柄がそれぞれ折れている。鎌身の長さ11cm, 鎌身の最広部幅4.5cm, 矢柄の残存部分の長さ10cm。

3. 鉄鎌（図3）（写真3）

平根式定角形の鉄鎌であるが、鎌身は先端が少し欠損しているだけで、ほとんど、原形を保っている。鎌身の長さ7.9cm, 同最広部幅3.5cm, 矢柄の残存部分の長さ9.6cm。

4. 鉄鎌（図2）（写真2）

平根式定角形の鉄鎌であり、本墳出土の平根式鉄鎌の中では最も良く原形を保っている。鎌身の長さ9.0cm, 同最広部幅3.2cm, 矢柄の残存部分の長さ5.6cm。

5. 鉄鎌（写真5）

平根式定角形の鉄鎌であるが、鎌身も良く原形を残しており、矢柄も残存しているものでは最も長い。鎌身の長さ8.5cm, 同最広部幅3.6cm, 矢柄の残存部分の長さ12.2cm。

6. 鉄鎌（写真6）

平根式定角形の鉄鎌である。鎌身と茎との接触部分が破損しているが、ほかの部分は原形のまゝである。鎌身の長さ9.9cm, 同最広部幅3.5cm, 矢柄の残存部分の長さ6.5cm。

7. 鉄鎌（写真7）

平根式定角形の鉄鎌であるが、鎌身の元の部分と矢柄が中程で折れている。鎌身の長さ7.5cm同最広部の幅3.2cm, 矢柄の残存部分の長さ1.1cm。

8. 鉄鎌（図 15）（写真 8）

尖根式のみ筒形の鉄鎌であるが、鎌身に粒子状のボラ砂が付着している。鎌身の長さ 60 cm, 同上端部の幅 1.6 cm, 矢柄の残存部分の長さ 4.5 cm。

9. 鉄鎌（図 5）（写真 9）

尖根式三角形の鉄鎌であり、鎌身はボラ砂は付着しているものの、完全な姿を保っている。また、矢柄も茎の部分の締め巻きされた樹皮も比較的残っている。鎌身の長さ 50 cm, 同最広部幅 1.8 cm, 矢柄の残存部分の長さ 10.6 cm。

10. 鉄鎌（図 4）（写真 11）

尖根式のみ筒形の鉄鎌であるが、鎌身の下半部が折れている。鎌身の長さ 46 cm, 同下部の幅 1.1 cm, 矢柄の残存部分の長さ 5.2 cm。

11. 鉄鎌（写真 10）

尖根式のみ筒形の鉄鎌であり、小砂が身に付着しているが、原形は保たれている。鎌身の長さ 4 cm, 同下部幅 1 cm, 矢柄は残存部分が 7 cm。

（2）剣

鉄鎌が納置されていた玄室東北部、奥壁に平行して 4 本の剣が副葬されていた。しかし、剣身はすべて欠損している。

1. （図 9）（写真 12）

剣身が折れていて茎の部分の身は欠げている。剣身の長さ、24.8 cm, 身幅 2.6 cm。

2. （写真 13）（図 11）

剣身が 3ヶ所で折れているが、鋒以外は遺存しており、大体、原形が把握できる。柄の部分は鹿角装の痕跡が残っている。剣の全長は 40.8 cm, 剑身は 29 cm, 身幅は中央部で 3.1 cm 剑身の中程には鞘の木質部が残存している。

3. （図 10）（写真 14）

短い剣であるが、関に近い所で剣身が二つに折れている。身には鞘の木質部が付着して残存している。剣の全長は 14 cm, 剑身は 12.5 cm, 身幅は中程で 2.8 cm。

4. （写真 15）

全面、鞘に覆われている短剣であるが、鋒が欠損し、茎も、わずかに、残存している。剣の全長は、18.4 cm, 身の長さ 17 cm, 茎の長さ 1.4 cm, 鞘の両面ともに木質部が遺存している。

（3）刀子

本墳の玄室北側と中央部の人骨下に把と刀身の揃っている刀子が 8 本と刀身のみが 1 本検出された。そして、ほとんどの把に鹿角装具が着装されており、鹿角装でないものは 1 本のみである。しかし、刀身は

すべて、折れている。

1. (図6) (写真16)

鹿角装の刀子である。刀身が鋒に近い部分で折れているが、全体的に、原形が保たれている。しかし、刀身の銹化は相当にひどい。刀身の長さ、7.5cm、身幅は関の部分で1.5cm、鹿角製刀装具の長さは4cm、その茎は1.8cm。

2. (図7) (写真17)

比較的に小形の鹿角装刀子であるが、刀身の破損はなく、完全な形をしている。全長8.5cm、刀身の長さ5.2cm、身幅は関の部分で1.5cm、鹿角装刀装具の長さ3.3cmである。

3. (写真18)

刀身の長さ6cm、身幅(関の部分)は1.5cm、鹿角装把の長さ3.2cm、刀身は関に近い部分で折れている。

4. (写真19)

刀身の長さ1.3cm、刀幅1.7cm、鹿角装の把は長さ4.2cm、刀身は3ヶ所で折れており、銹化も相当進んでいる。

5. (写真20)

一見、尖根式の鉄鎌のように見えるが、細形の刀子に類別しておく。全長1.1.3cm、刀身の幅は中央部で1.2cm、関に近い部分で折れている。

6. (写真21)

玄室内の最終遺物整理の時、表面には露出していなかったが、人骨下から土壤に混入して検出された。刀身8.8cm、刀身幅は関の部分で1.5cm、鹿角装把4cm、刀の全長1.2.8cmとなっている。

7. (写真22)

(6)の刀子と同一の地点から発見されたものであるが、刀身の中央部が折れて身の下半部が欠損している。刀身の長さ8.5cm、身幅は中央部で1.5cm、鹿角装把3.4cmある。

8. (写真23)

(6, 7)の地点の人骨下から崩土に混じて発見されたものであるが、刀子の刀身のみ検出された。把の部分は、恐らく、崩土をあげる際に、その中に混入したのではないかと思われる。

9. (写真24)

玄室中央部の人骨下を清掃した時に検出されたものである。刀身の長さ7.8cm、身幅は関の部分で2cm、鹿角装の把の部分も片面のみ残存しているが、反対側は鹿角装具も別離されて、茎が現われている。茎の長さ5.5cm。

④ 鋏

1. 貝 鋏(写真26, 28)

この貝釧は玄室中央部の床面上に納置してあった人骨の両下脛骨にはめ込んだ状態で副葬されてあつた。その直径は約4.7cmあるが、採りあげた時点ではほとんど折れていたが、両方合わせて約12ヶが教えられる。

2. 鉄釧（写真27）

貝釧が副葬されていた右下脛骨の下から検出されたが、中央部で折れている。直径5cm、鉄輪の径6cm、銹化しているが原形は保たれている。

IV まとめ

以上、高崎町原村発見の地下式A号墳の内部構造、および、副葬品などにつき考察してきたが、形式的には玄室が主軸に対して直角に長方形形状を呈し、逆P字形の形態をなしている。また、天井は崩壊して形式不明であるが、一部分、切妻形をしていること、さらに、出土遺物に平根式の鉄鎌がかなり含まれており、それに、剣も副葬され、特に、刀子の把は、ほとんど鹿角装となっていることなどを考慮に入れると、地下式墳の年代としては古い方になるが、玄室の変化や、長い羨道など内部構造の点から、編年的には、5世末期から6世紀早々前後に比定される。

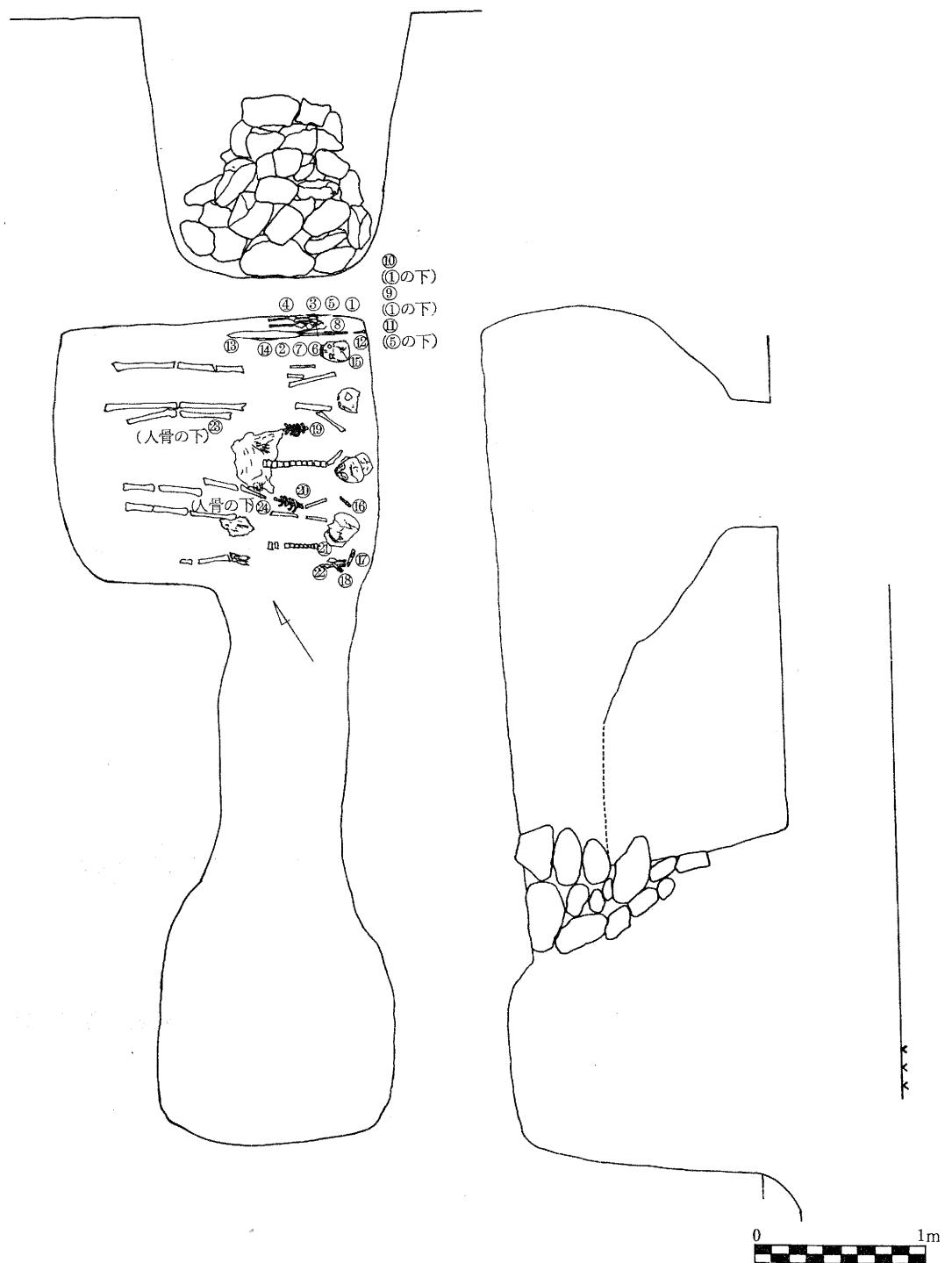
B 号 墳

昭和45年2月2日の造成工事により、地下式A号墳の東北、約5mの地点にB号墳が発見された。本墳はA号墳よりも規模が小さく、崩土の土あげ作業も、比較的容易に行うことができた。

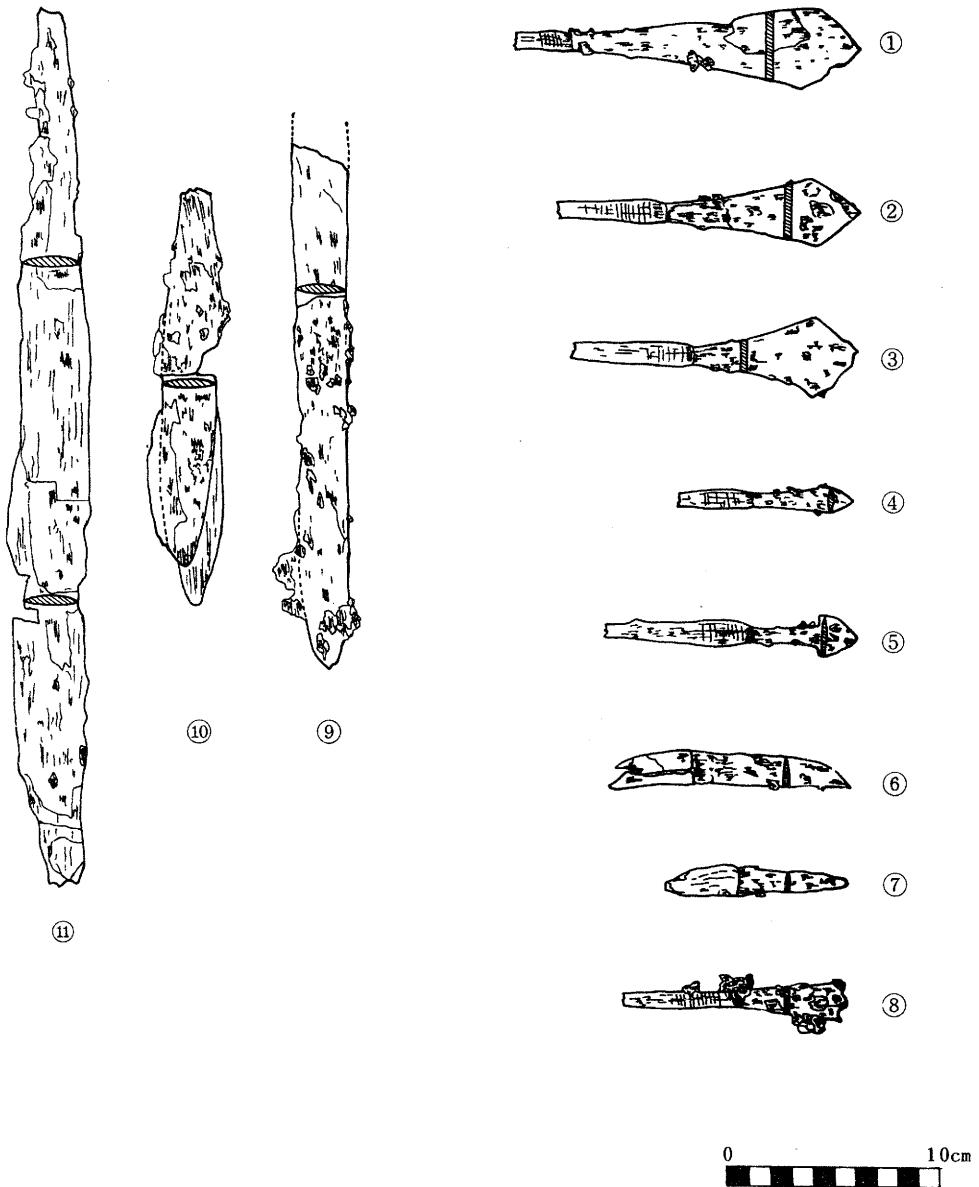
内部構造としては、A号墳と同様に、ボラ土層が掘削されて豎穴、玄室が造られている。豎穴は方形に掘り込まれ、奥行は底部で1.07m、横幅が中央部で1.15m、床面から造成工事による地表面までは0.98mであるが、原地表面までは1.9mとなっている。羨道はA号墳と同様、かなり長く营造されており、その長さ1.2m、幅は中央部で0.65m、それに、高さは羨門付近で0.58mとなっている。羨門には閉塞石などによる遺構は全く見当らなかった。玄室はA号墳と同じく逆P字形のプランを呈しており、その方位は主軸に沿って北20度東になっている。また、平面の形状はA号墳と類似し、両奥壁の隅は角張っているが、北側壁の隅は、わずかの入り込みを残して羨道に通じており、これに対し、南側の角隅は丸形になっている。内部構造も特殊な遺構はなく、床面にも敷石などの施設はなかった。天井部は、相当に、剥落して平らな状態になっており、その形状を確認することは困難であったが、側壁に切妻形屋根の遺構が一部認められた。しかし、天井の屋根形傾斜面はかなり、ドーム形を呈していた。玄室の奥行は中央部で1.15m、横幅は同じく、中央部にて1.85mあり、それに、高さは0.64mとなっている。遺物としては玄室内の奥側壁の北側隅の近くに頭蓋骨が納置され、その傍に、刀子（写真25）1本、さらに、その下に重なって鉄鎌片らしきものが1本同一地点から検出された。なお、床面中央部に人骨片が納置されていた以外には何ら遺物らしきものは検

出されなかった。ところで、副葬されていた刀子は全長 152 cm あり、そのうち、10.2 cm は刀身となっている。刀身は欠損なく、完全に遺存しているが、小砂が全面に付着しており、また、把の部分の鹿角装具もかなり保存度が良い。身幅は闊の部分で 1.5 cm ある。刀子の下から検出された鉄鎌様鉄片は長さ 4 cm、幅 1.3 cm となっている。

以上、地下式 B 号墳につき考察してきたが、その形式が小規模ではあるが、A 号墳と、ほとんど、同一であり、わずかに、天井部に差違が認められることもないが、同一地点から発見されたこと、出土遺物は確実なものが刀子 1 本であったが完全な鹿角装のものであったことなどから編年的には A 号墳と同一年代に比定される。しかし、強いていえば、A 号墳に次いで當造された地下式墳であろうと思われる。

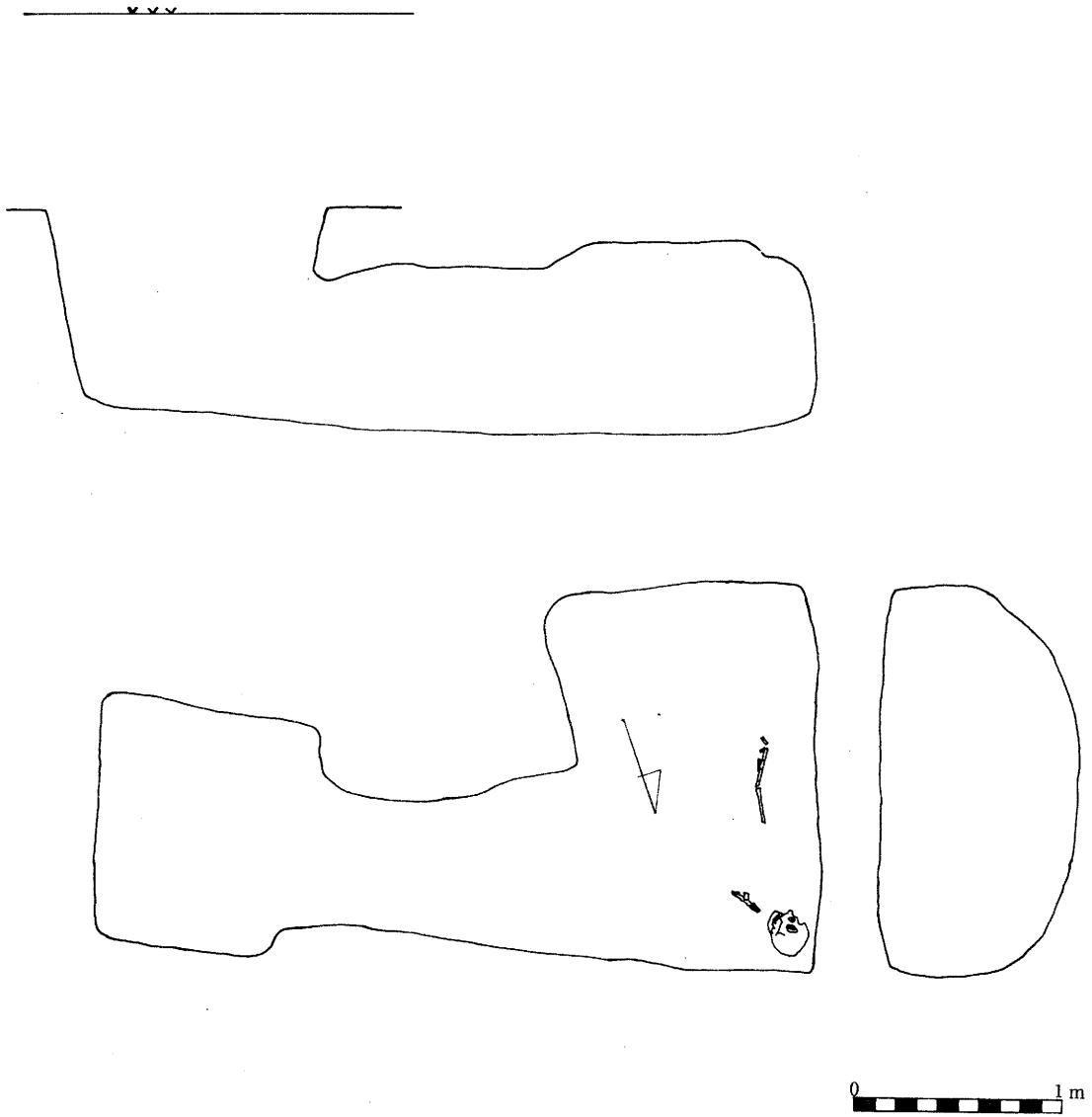


第1図 横谷原村地下式A号墳実測図



第2図 横谷原村地下式A号墳副葬品実測図

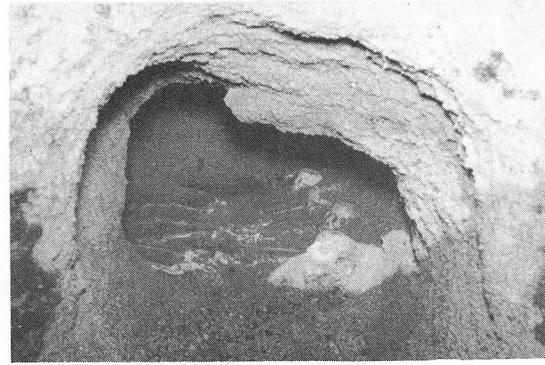
0 10cm



第3図 横谷原村地下式B号墳実測図



地下式 A 号 墳



地下式 A 号 墳
羨道より玄室を望む



地下式 A 号 墳 羨道閉塞石

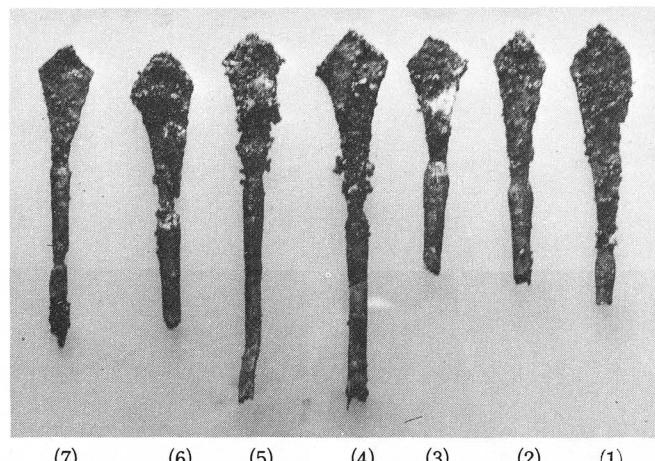


地下式 A 号 墳 玄室天井部

図版 2



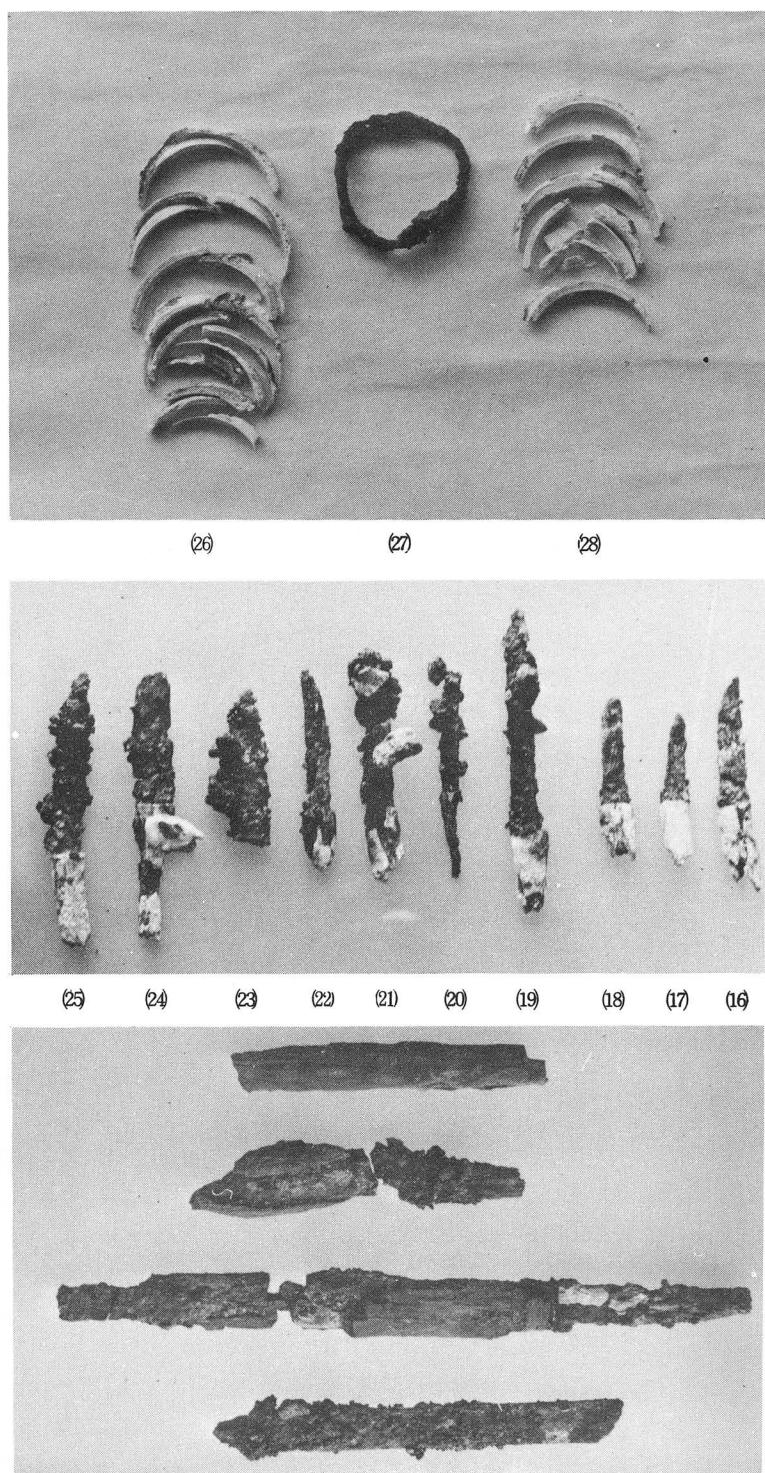
(1) A号墳 玄室内部



(7) (6) (5) (4) (3) (2) (1)



(11) (10) (9) (8)
(2) A号墳 副葬品



A号墳副葬品
(25はB号墳出土)

宮崎県文化財調査報告書

第19集

発行 昭和52年3月31日

宮崎県教育委員会

編集 宮崎県教育庁文化課

